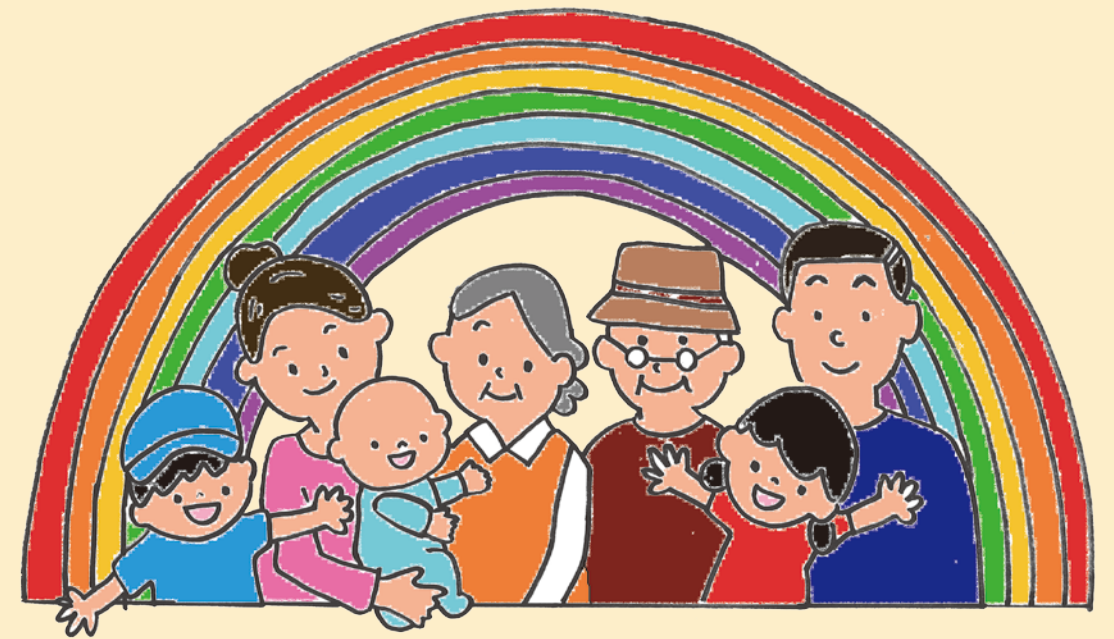


子育て家庭に寄り添う 支援者マニュアル



は し め に

我が国の人口は、平成 18 年をピークに減少局面へと移行し、世界にも類を見ない早さで本格的な人口減少社会を迎えようとしています。その要因としては、生涯未婚率の上昇、晩婚化、晩産化傾向が進んだことによる合計特殊出生率の減少が挙げられます。本県においても、様々な取り組みを進めてきた結果、平成 16 年には 1.24 であった合計特殊出生率が、平成 25 年には 1.42 まで回復したものの、人口減少、少子化に歯止めがかかったわけではなく、今後さらに取り組みを充実させる必要があります。

そういう中で、県では「子育てしやすい環境づくり」や「子どもと子育て家庭を支える社会づくり」などを柱とした「ひょうご子ども・子育て未来プラン」を平成 27 年度に策定し、誰もが安心して子育てできる兵庫の実現を目指して総合的な施策推進に取り組んでいるほか、昨年 9 月に策定した「兵庫県地域創生戦略」においても、人工の自然増対策、社会増対策を重要な柱に位置づけ、各般の取り組みを進めています。

核家族化や少子化の進展は、家庭における子どもの養育力の低下に繋がっていると言われており、子育ての孤立化や子育て不安の増大が、児童虐待を引き起こす原因の一つともなっています。こうしたことから、自治体、NPO、大学等の様々な主体により、各地域で展開されている子育て支援拠点の役割は、ますます重要であり、その活躍が期待されるようになっていきます。

一方、各地域で展開されている子育て支援拠点は、支援者であるスタッフの熱意と日々の努力に支えられているところが多く、各拠点で提供されているサービスのレベルが必ずしも同等とはいいがたい面があったことも否めません。また、子育て家庭のニーズが非常に多岐にわたるため、そのことが支援スタッフに重い負担となり、悩みや迷いを生じさせるということも少なからずあり、このため、子育て支援についての系統だったマニュアルを求める声が多くありました。

そこで、県の少子対策事業の一環として、兵庫教育大学子育て支援ルーム「GENKi」と児童館等が連携し、体験活動や親子のふれあいに焦点を当て、子育て家庭支援の基本姿勢から環境づくり、支援手法、地域との連携など子育て支援に関わる幅広い内容を体系的に網羅した『子育て家庭に寄り添う支援者マニュアル』を作成しました。

この冊子が県下各地域で活躍されている子育て支援者の方々に幅広く活用され、兵庫の子育て支援がますます充実することに繋がれば、これに勝る喜びはありません。

兵庫県健康福祉部こども局長 四海達也

目 次

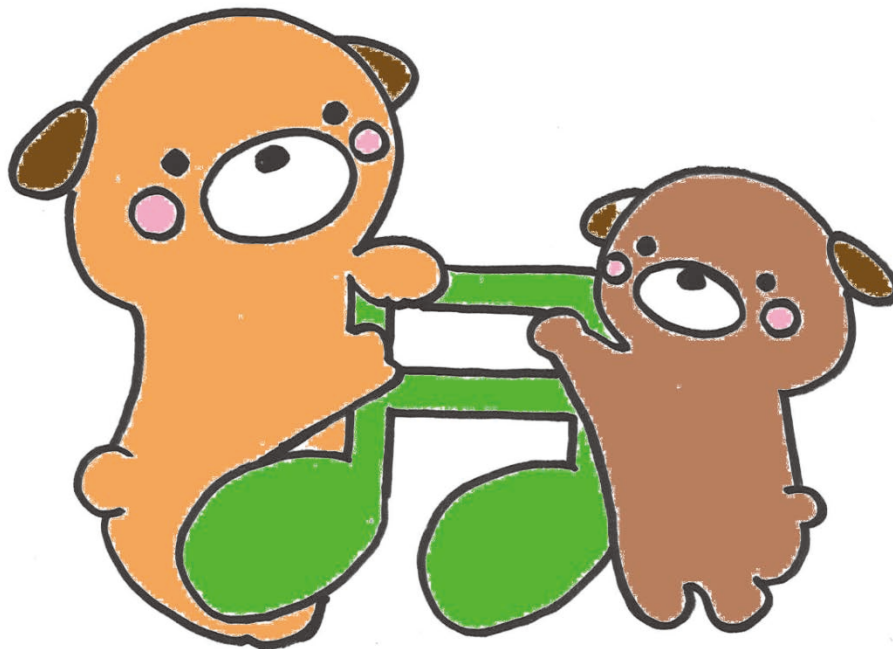
はじめに

第 1 章 「子育て支援とは：理論編」	1
1. 子育て支援はなぜ必要なのか	2
2. 子育て支援員に求められる資質	3
(1) 支援員の位置づけ	3
(2) 子育て環境の変化の理解	4
(3) 親子を受容し見守る姿勢	5
(4) 乳幼児の発達を理解	6
(5) 取り組みを振り返る姿勢	6
第 2 章 「みんなで子育て：技能・実践編」	7
1. 子育て家庭支援の基本姿勢	
◇ 親子の見守り	8
◇ 子育て支援に必要なアイ(目)とは？	10
◇ 良いところ見つけのサポーター	12
◇ 心の天気予報士に	14
◇ 会話のペースを合わせよう	16
2. 親子が心地よく過ごす場所づくり	
◇ 親子が気軽に立ち寄れる工夫	18
◇ 施設の中を探検しよう	20
◇ 季節ごとの手作りコーナー	24
◇ タイプ別パパの子育てアイテム	26
◇ 見やすい おたより作りの工夫	34
◇ 感染や事故を防ごう	36
3. 地域連携	
◇ 親子が楽しく参加できるプログラムづくり	38
◇ 集まれ！人・モノ・情報	40
◇ 地域の文化・人をつなごう	42
◇ 学生ボランティアは大歓迎	44
◇ 小・中学生、高校生とのつながり	46
4. スタッフの協働・振り返り	
◇ スタッフのチームワークはルームの要	48
◇ 関係調整のテクニック	50
◇ 親とスタッフが共有できる記録	52
第 3 章 「子どもをめぐる共生社会へ」	55
1. 多世代交流の場として	56
(1) 高齢者の思い	56
(2) 世代による親子への眼差し	57
2. 社会全体で子育てを	59
おわりに	60
引用・参考文献・資料	61

第1章

子育て支援とは

理論編



1. 子育て支援はなぜ必要なのか
2. 子育て支援員に求められる資質
 - (1) 支援員の位置づけ
 - (2) 子育て環境の変化の理解
 - (3) 親子を受容し見守る姿勢
 - (4) 乳幼児の発達の理解
 - (5) 取り組みを振り返る姿勢

1. 子育て支援はなぜ必要なのか

現在では、多くの自治体・NPO・大学等で子育て支援ひろば・ルーム等の場所が提供されています。なかには 50 年以上の歴史をもつところもありますが、ほとんどが最近開設されたものです。この数年間の子育てをめぐる変化は急激なものであり、子育ての大変難しい時代に突入していると言っても過言ではありません。また、「賢い」子どもを育てる目的で、多くの情報に翻弄されているのが、現代の親たちの姿ではないでしょうか。

一方で、これまでの大人中心の生活から赤ちゃんのいる生活へ急変し、そこに立ち往生するものの、子どもは待ってくれない、という状況も見られます。これは、大人の生活が昔からは信じられないくらいのスピードでまわっていることも大きな要因です。そのような中で苛々することは、これまで大人中心の生活をしてきた人にとっては当たり前のことでしょう。

本来は生まれてきた子どもとゆったりゆっくり、その子の成長のリズムにあわせて親も成長していき、「大変だけど子育てって楽しい」という喜びと充実感を得ることが、子どもから親に与えてもらった大きなプレゼントだと思うのです。

そのように考えると、ちょっとしたコツで今の「大変」、「しんどい」を「楽しい」に変えることができる、支援を目指していきたいです。

諸外国でも現在のような超スピード感の中で、昔から変わらない子どものゆったりした成長を息長く見守る、という課題に直面しています。しかし、子どもの成長の基本的な在り方や、充実した子育て期こそ、次につながるといった志向性をそれぞれの親がしっかりと持っていることも事実です。

わが国でもそのような考えのもと、今、すべき支援とは、という課題から「子育て支援政策」が打ち出され、特にこの 27 年度からは「子ども・子育て支援新制度」のもと、大きく舵が切られてきました。また、子育て世代だけの問題ではなく、「社会で子育て」というスローガンのもと、子どもを中心とした多世代交流も注目されています。これは、大きく地域コミュニティを形成することでもあるのです。

このマニュアルでは、そのような道筋を考えながら、楽しく子育てをするために少しでもヒントになるようなことについて、出来るだけわかりやすくデザインして作成しました。

キーワードは、「みんなで子育ての楽しさ・充実・分かち合い」です！

2. 子育て支援員に求められる資質

支援という言葉には、対象である何かを支えるという意味があり、特に子育て支援の場合は、親を支援するとともに、子どもの育ちを支援する、という意义があります。したがって、親の代わりに子育てをするのではなく、むしろ親が子育てをする姿勢を支える、ということであり、間接的な意味合いが大きいのです。

子育て支援員は、「親の自立的・主体的な子育てを応援する」というスタンスを基本的に持っていてほしいものです。これは、保育園の保育士でも同じことです。子どもの育ちを第一に考え、その人的環境として、親が第一義的にあり、そして、親子をセットで捉えて丸ごと出来る範囲でお手伝いすることで、子育ての大変さが少しでも軽減して、楽しく生きがいとなるべく支えることでしょう。

したがって、お母さん、お父さんの代わりに何かをすることは決して良いことではありません。時には、お母さんのリフレッシュが意図されることもあります。原則的には、親子の関係性をよりふさわしいもの、すなわち、親も子どもも心地良い日常生活を送ることが目的となっています。

（1）支援員の位置づけ

そこで、支援員としての役割はどのようなものでしょうか。

まず、スタンスとして、以下の図のように、子どもをめぐる親と地域社会の間の太線の部分にあたるところが支援員の位置ではないかと思います。

「え？随分細いところ・・・」と思われるかもしれませんが、実際には本当にわずかな場所と言えるでしょう。子どもの成長にとって親の位置というのは、実際の図よりももっとももっと太いものであり、責任のある大きなものになっています。さらに、子どもの立場から見ると、とても偉大なものです。いつかは、自立して離れていくにしてもこれだけの厚みで子どもは授かっているものなのです。

支援員は、細い枠であっても、しっかり親子を支える重要な立場です。核家族化が進み、地域社会とのつながりが希薄な現代にとっては、支援員はあってもなくても良いものではなく、今の時代だからこそ重要な位置を占めていると言えます。それもさりげなく、自然体で支援するには、難しい技術が必要です。

以下、その内容について述べていきますが、その前に現代の子育て状況を知るためにデータから見てみましょう。

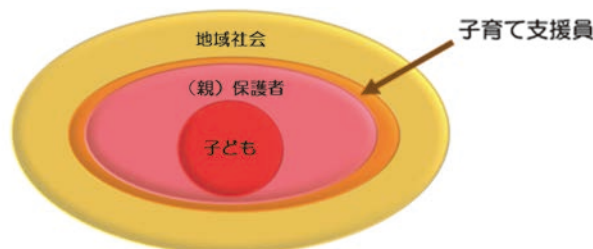


図 1：子育て支援員の役割

（２）子育て環境の変化の理解

子育てする環境の変化は、社会の経済的変化に大きく連動しています。戦後高度経済成長と遂げて、わが国は短期間に大きな変化をしました。表１から分かるように、単独世帯の増加によって、全世帯に占める核家族の比率はほとんど変化していませんが、その実数を見ると、夫婦と子どもの世帯やひとり親と子どもの世帯は、はっきりと増加しています。特に、ひとり親家庭はこの約 45 年間で２倍以上に増えています。その結果、急速に大家族から核家族化に向かっていき、大家族にあった祖父母同居等による三世代の子育て機能は弱くなっています。現在もその傾向が続いています（表１）。

表１：世帯構造別推計世帯数及び構成割合の推移

(1,000世帯, %)

区 分	総 数	単独世帯	住み込み・寄 宿舎等に居住 する単独世帯	その他の 単独世帯	核家族 世 帯	夫婦のみ の世帯	夫婦と未 婚の子の みの世帯	ひとり親と 未婚の子 みの世帯	三世代 世 帯	その他 の世帯
昭和45年(1970)	29,887 (100.0)	5,542 (18.5)	2,514 (8.4)	3,028 (10.1)	17,028 (57.0)	3,196 (10.7)	12,301 (41.2)	1,531 (5.1)	5,739 (19.2)	1,577 (5.3)
50 (1975)	32,877 (100.0)	5,991 (18.2)	2,248 (6.8)	3,743 (11.4)	19,304 (58.7)	3,877 (11.8)	14,043 (42.7)	1,385 (4.2)	5,548 (16.9)	2,034 (6.2)
55 (1980)	35,338 (100.0)	6,402 (18.1)	1,643 (4.6)	4,759 (13.5)	21,318 (60.3)	4,619 (13.1)	15,220 (43.1)	1,480 (4.2)	5,714 (16.2)	1,904 (5.4)
60 (1985)	37,226 (100.0)	6,850 (18.4)	1,647 (4.4)	5,204 (14.0)	22,744 (61.1)	5,423 (14.6)	15,604 (41.9)	1,718 (4.6)	5,672 (15.2)	1,959 (5.3)
平成 2 (1990)	40,273 (100.0)	8,446 (21.0)	1,664 (4.1)	6,782 (16.8)	24,154 (60.0)	6,695 (16.6)	15,398 (38.2)	2,060 (5.1)	5,428 (13.5)	2,245 (5.6)
7 (1995)	40,770 (100.0)	9,213 (22.6)	1,385 (3.4)	7,828 (19.2)	23,997 (58.9)	7,488 (18.4)	14,398 (35.3)	2,112 (5.2)	5,082 (12.5)	2,478 (6.1)
12 (2000)	45,545 (100.0)	10,988 (24.1)	1,388 (3.0)	9,600 (21.1)	26,938 (59.1)	9,422 (20.7)	14,924 (32.8)	2,592 (5.7)	4,823 (10.6)	2,796 (6.1)
17 (2005)	47,043 (100.0)	11,580 (24.6)	914 (1.9)	10,667 (22.7)	27,872 (59.2)	10,295 (21.9)	14,609 (31.1)	2,968 (6.3)	4,575 (9.7)	3,016 (6.4)
22 (2010)	48,638 (100.0)	12,386 (25.5)	1,003 (2.1)	11,383 (23.4)	29,097 (59.8)	10,994 (22.6)	14,922 (30.7)	3,180 (6.5)	3,835 (7.9)	3,320 (6.8)
23 (2011)	46,684 (100.0)	11,787 (25.2)	852 (1.8)	10,935 (23.4)	28,281 (60.6)	10,575 (22.7)	14,443 (30.9)	3,263 (7.0)	3,436 (7.4)	3,180 (6.8)
24 (2012)	48,170 (100.0)	12,160 (25.2)	789 (1.6)	11,371 (23.6)	28,993 (60.2)	10,977 (22.8)	14,668 (30.5)	3,348 (6.9)	3,648 (7.6)	3,370 (7.0)

④ 三世代世帯：世帯主を中心とした直系三世以上の世帯。平成7年は兵庫県を除いたもの。平成23年は岩手県、宮城県、福島県を除いたもの。平成24年は福島県を除いたもの。

資料：厚生労働省大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」

これまでは、母親が主に子育てをしていますが、周囲で支えてくれる環境があったものが、急に子育ての孤立化という現象が起こってきたのです。さらに、少子化や地域社会の希薄化も大きな影響を与えています。合計特殊出生率も昭和 30 年には 2.37 だったものが、平成 27 年には 1.42 まで落ち込んだままです。これは、政策の影響で昨

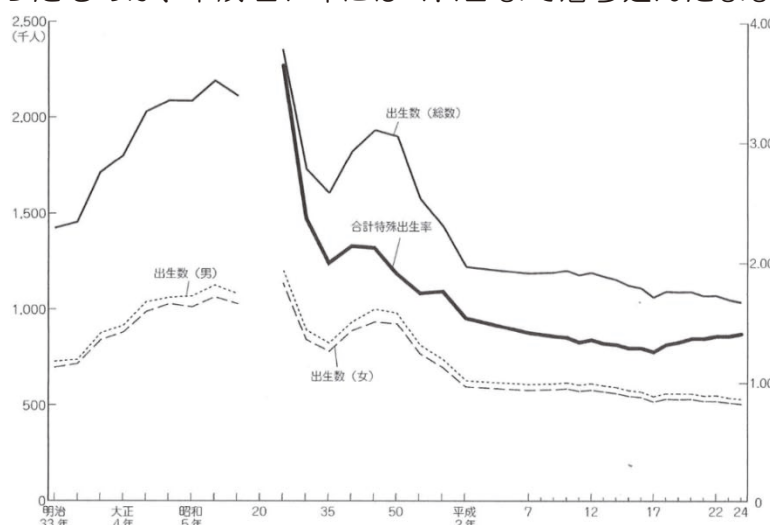


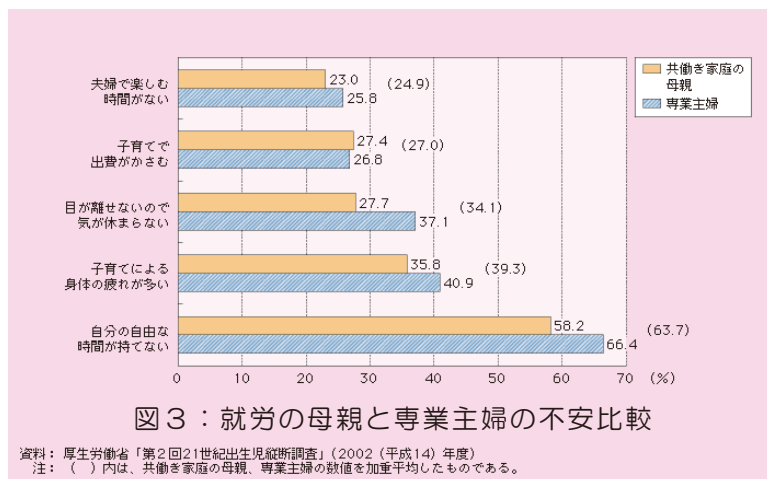
図 2：合計特殊出生率の年次変化

年あたりまで上昇しつつあったものが、27 年には下がり、政策の効果も問われ、依然として大きな社会問題となっています（図 2）。

このように、核家族化と少子化により、以前は血縁で子育てをしていたものが、急に子育てにかかわる周囲の大人がいなくなり、さらに、夫は仕事で夜遅い帰宅である、という状態で子育ての孤立

化はますます助長されていっている状態です。最近「イクメン」という言葉を厚生労働省も盛んに使い、ワークライフバランスや男性の育児休暇取得も推奨するという風潮になりましたが、まだまだ定着するには至っておりません。

さらに、子育ての不安は、就労している母親よりも専業主婦に多いという最近の結果が出ています（図3）。



これは、子育て中の母親にとって、仕事をしていることで得られる知人等のネットワークの違いによるものとされています。とりわけ幼い子どもの育児は、思うようにいかず、イライラさせられることも多く起こります。育児不安、育児ストレスはこのような社会状況の中でさらに増していきます。また、母親である

ことについて、わが国は「当たり前」という社会風潮があります。これは、社会の変化が急激であることに相反して昔から変わらない女性にかかわる意識の問題です。すなわち、母性軽視にまつわる女性の人権の問題でもあり、根は深いものだと思います。

これらの課題を現実的に少しでも解決するために、子育てをサポートする支援員の役割はますます重要なものとなっていることがわかります。

（3）親子を受容し見守る姿勢

子育て支援員は、地域社会と養育者・子どもを「子育て」という営みをとおしてつなぐ役割がありますが、その前提となるのが、社会人としての常識です。当たり前のことですが、模範となるようにすることは、なかなか難しいことです。

まず、親子に対して、明るく朗らかな気持ちで心から挨拶ができることです。「おはようございます」「こんにちわ」という言葉を自然に、言葉だけではなく、心を込めて支援員から口に出すことができる、そして、笑顔で身体全体で語りかけることができる、ということです。表面だけを取り繕っていて目が笑っていないことは結構あるものです。母親もちろん、幼い子どもはもっと敏感にその雰囲気を感じ取ります。そのためにも、心から Welcome の気持ちを持ちましょう。そして、親子全体の雰囲気を支援員も身体全体で感じ、様子をさりげなく観察しましょう。つまり、心からの挨拶と同時にしっかりとその親子を受容し、見守ることです。この両方の目を持っていることが、専門性だと思います。その眼差しはとても温かいものでなくてははいけません。

このように考えると最初に出会う「挨拶」そのものが何よりも重要であることがわかると同時に、とても気遣うべきものであることがわかります。

「つなぐ」役割は、まず支援員から親子とのつながりを持つことがスタートです。そして、子育てに必要な地域の人々との関係を「つなぐ」工夫を不断にしていくこと、このことも大きな役割を担っています。その中には子ども関係との連携機関も含まれ

ています。

（４）乳幼児の発達を理解

幼い子どもたちは、自分から世界を拓くときに、様々なモノとの出会いをきっかけにしています。したがって、心身の発達をよく知って、促す環境を考えていくことが必要です。幼い子どもにとって身近な環境におかれているものは、何でも探究の対象です。そのように考えると、探究心旺盛なものに答えながら、そこに学びの要素が入っていることが重要な「教育的環境」と言えるでしょう。このことは、幼稚園教育要領、保育所保育指針や新しい教育・保育要領に「環境を通して学ぶ」ことが明記されています。このように、子どもたちが自発的に遊ぶ環境として、意思を持ってハイハイしたり、つかまり立ちをしたり、バギーに人形をのせて移動したり、憧れのお母さんの様子をまねたりする遊び等、身体のいろいろな機能を働かせる遊びの環境を準備することが重要になってきます。

また、幼い子どもは「馴化する」ことは早く、新しもの好きである一方ですぐに飽きる性質も持っています。季節による壁面はもちろん、玩具の場所、絵本の並べ方等出来るところから少しずつ変化をつけていきましょう。実際に、子どもたちが、とても敏感に環境の変化に気づき、驚かされることがあります。

さらに、子どもとモノとの出会いは、個性があり、子どもによって異なります。保護者には自分の子どもはどのようなことに興味関心を持っているのか、しっかりと見てもらい、わが子の特性を把握してもらうことが必要になります。その見方も「へえ一面白いところがある」というように、子どもの思いを発見して、保護者自ら楽しむことがコツです。それぞれの子どもが心地よいと思うことは、それぞれで違っていています。それは見ている大人にとっても大変興味深いものです。

（５）取り組みを振り返る姿勢

支援ルームにかかわる者にとって、重要なことは、自らのルームでの親子へのかかわりを振り返ることです。そのことによって、より優れた学びの環境がつくられます。また、保護者にとっては、ほっとする居心地のよい時間となったのか、ということを見直すことも必要です。

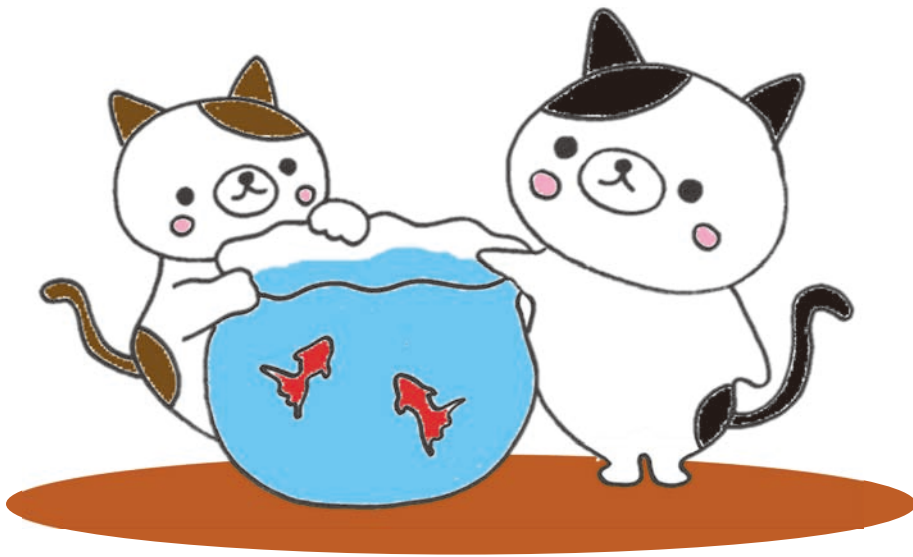
そのためには、記録をとることが役立ちます。まず、良かったこと、感動したこと等の気になることを記録として残し、その後、どのような環境がよかったからこのような事柄が起こったのか、あるいはどのような言葉かけが良かったのか、といった反省の根拠となるのが、この記録です。

また、記録をとることで複数の子育て支援員での共通の認識が「事実」を通して得ることが可能になります。この支援員同士の共通の思いは、はかりしれない大きな力となります。そして、良いところを語り合うことで、その親子に対しての眼差しが温かいものになります。少しずつでも良いので、記録をとって話し合う習慣をつくっていったらと思います。

第2章

みんなで子育て

技能・実践編



1. 子育て家庭支援の基本姿勢
2. 親子が心地よく過ごす場所づくり
3. 地域連携
4. スタッフの協働・振り返り

1. 子育て家庭支援の基本姿勢

親子の見守り

あなたは、どのタイプ？

最初に、支援者としての自分の立ち位置を振り返ってみましょう。

保育経験のあるなし、自分の子育ての体験、または自分がどのような育ち方をしてきたのかなど、人にはそれぞれヒストリーがあり、その中で個人の性格や意識の違いもあります。こうした今までの経験値から、知らず知らずに人との関わり方には、特徴が出てきます。このことは、良いか悪いかということではなく、支援者として、親子と関わる時には、自分の特徴を意識しておくことが大切です。

外から見ているー傍観者タイプ



あなたは、目の前の出来事を客観的に見るのが得意です。

今、何をするのがベストかを判断することができます。混乱している親子に対して、落ち着きを取り戻すために、どのようなことをすればよいかアドバイスしてあげましょう。

子どもと遊びたくなるー遊び仲間タイプ



あなたは、子どもの視点に立てる子どもの気持ちのよき理解者です。

子どもとの良い関係を軸として、保護者に子どもの気持ちを理解してもらい、どのような遊びが子どもを楽しませることができるのかのモデルになりましょう。

お世話をしたくなる一世話好きタイプ



あなたは、とても面倒見の良い人です。親子がくつろぐことのできるいろいろな場所を用意することができます。

小さな親切は、大きな魅力です。みんなの気づかないところを、フォローしてあげましょう。

家庭に入り込みたくなる一ぞっこんタイプ

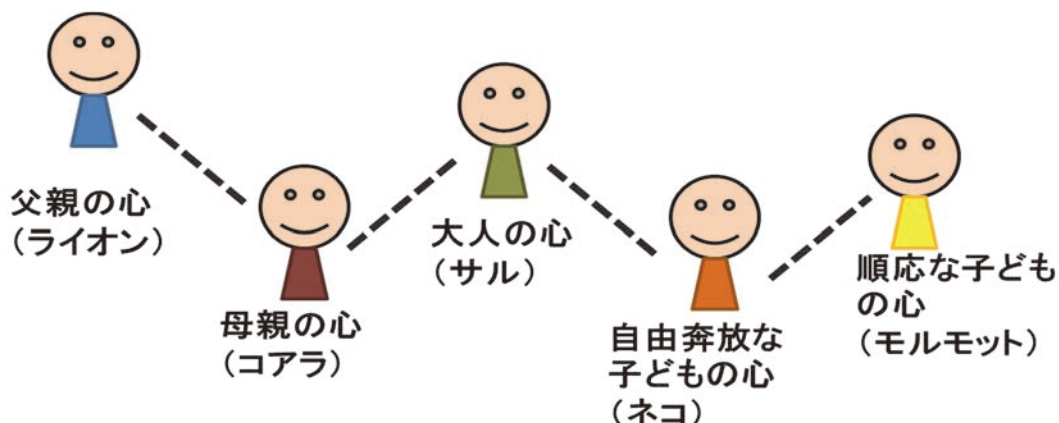


あなたは、孤立無援状態に立たされた親子にとって、一緒に動いてくれる心強い味方です。

一人ではできないことも、自分を応援してくれる存在があることは、勇気を奮い起こすための大きな原動力になりますね。

それぞれの個性を生かした関わり方でよいのです。ただ、一人の思い込みで動いてしまうと、方向がずれてしまうこともあります。その点は、自分や親子を客観的に見る視点を持つように心掛け、自分と違うタイプの人に相談したりすることで、バランスがとれ、大きく偏った関わりに陥らずに済みます。

人の心は、多面的で相手や状況によっても変化します。今、どの心が強く働いているかを意識するのもよいでしょう。エゴグラムでは、下の5つの心の作用を見ます。



1. 子育て家庭支援の基本姿勢

子育て支援に必要なアイ(目)とは？

大人中心の社会の中で、子育てをする親は、知らず知らずに片隅に追いやられています。外からの目を気にして、外出を避けたり、反対に紛れてしまえば大丈夫とばかりにキッズコーナーで羽目をはずしたり、早々にベビースクールに任せたりという方向にいかないとは限りません。

現代の親子がさらされる怖い「目」は？



あなたのアイ（目）は、どのような目でしょう？

支援のポイントとなる、3つの視点をご存知でしょうか？



親子を取り巻く状況を少し高い位置から、眺めることが出来る鳥の「目」です。
親子にとって、望ましい方向を指し示すヒントが見えてくる「目」です。

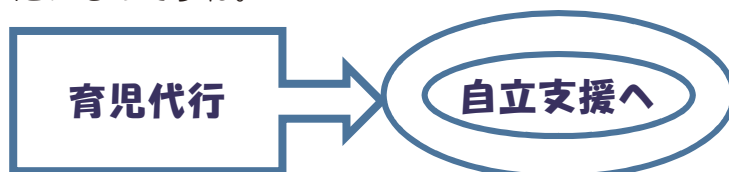
親子の立ち位置と同じ高さの「目」です。
親子の置かれている状況を当事者として、見ることのできる「共感」の「目」です。



保育者としての「目」です。
今までたくさんの親子と接してきた経験と、子どもの健やかな発達を支援する、「専門家」としての「目」です。

このように、複数の目(視点)を持つことで、支援を必要とする親子に対して、さまざまな角度から援助を考えることができるようになります。また、研修の際には、自分にはない視点を学ぶということが大事になってきます。

育児の主体は、保護者であることを忘れずに、「できないことをやってあげる」のではなく、自分がどうしたいのかを、保護者も子どもも見つけられるような支援となるように心掛けたいものですね。



1. 子育て家庭支援の基本姿勢

良いところ見つけのサポーター

親は、子どもをよりよく育てたいと願っています。そのために、どうしても気になるところが目につきがちです。「早く歩いてほしい」「ちゃんとおしゃべりできるようになってほしい」「友達に優しくしてほしい」「何でも食べる子どもになってほしい」等のように、理想の子ども像に近づけたいとがんばらせたくなくなってしまいます。保育園の担当の保育士さんも同じ思いにかられるかもしれません。すると、「早く、きちんと、しっかり」という完璧を求める関わりになってしまいます。

それでは、本当の子どものサポーターになるためには、どうすればよいでしょう。ここでは、3つのポイントを紹介します。

♥ 心のストライクゾーンを広げましょう

「心のストライクゾーン」とは、物事をプラスに受け止める「気持ちの幅」と考えてみましょう。

例えば、コップに入った牛乳が、「あと半分しかない」と言うのと、「まだ半分も残っている」と言うのでは、悲壮感漂う気持ちになるか、希望の持てる明るい気持ちになるか、大きく違ってきませんか。「ここまでは大丈夫、OK」と思える心のストライクゾーンを広げると、「何にもできない」ように思える子どもの中に、「良いところ」を見つけられる心のゆとりが生まれてきます。

♥ 発想を逆転してみましょう

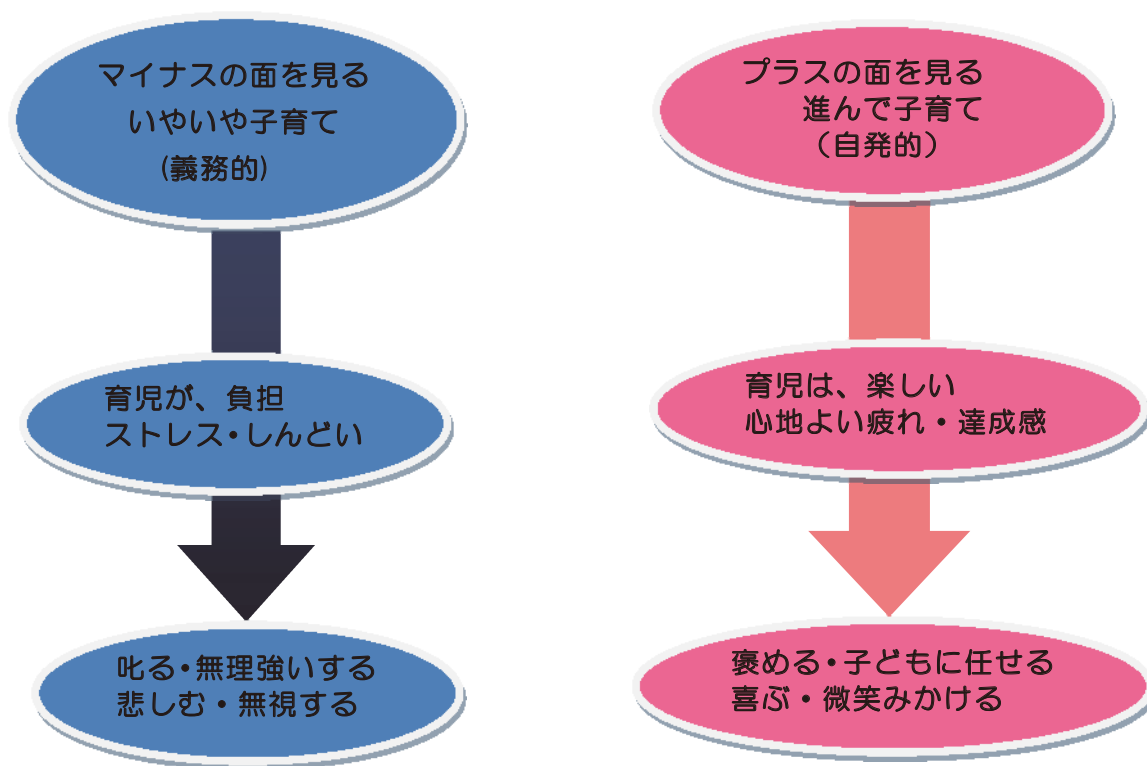
砂時計をひっくり返すように、マイナスイメージのことばをプラスのイメージのことばに、言いかえてみましょう。

おくびょう	➡	しんちょう
あばれんぼう	➡	かっぱつ
動きが多い	➡	エネルギー
がんこ	➡	一本気
しつこい	➡	粘り強い
気性が激しい	➡	情熱的
あきっぽい	➡	好奇心が旺盛
わがまま	➡	自己主張できる
気が小さい	➡	慎重派
過敏	➡	感受性が豊か

10個のうち、
いくつ、言い換え
できましたか？

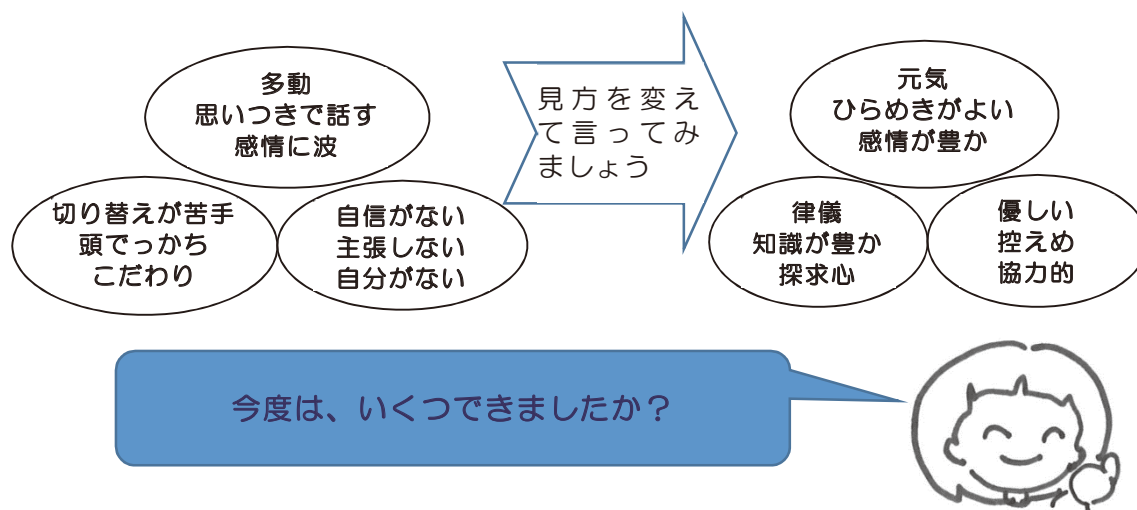
♡ 「良いところ」見つけの名人になると、育児のストレスも減少

あなたの支援する保護者には、どちらの育児をしてほしいと思いますか？



育児ストレスも、解消しようと頑張りすぎると違う負荷がかかります。また、子どもの良いところを見つけようとする、大人はエネルギーがいるものです。まして、24時間べったり密着している親子では、そう簡単にはいかないものです。だからこそ、日常生活から少し離れた状況にいる時をチャンスととらえ、支援者が少しエネルギーを注いであげましょう。

では、もう一度、サポーターのトレーニングにチャレンジしてみましょう。



1. 子育て家庭支援の基本姿勢

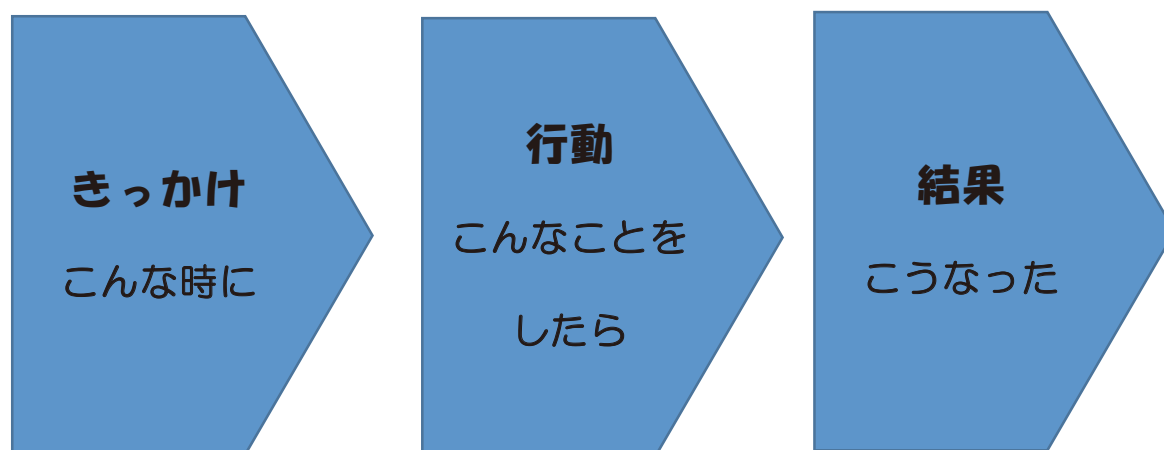
心の天気予報士に

例えば、「A 県は雨」という予報が出ていたとしても、雨雲は均一ではありません。ある地域は土砂降りでも、山を挟んで反対側は小雨ということはあるのが当たり前。持ち歩く傘も、手軽な折り畳み傘にするのか、しっかりとした大きい傘にするのか、お天気と相談して判断します。

人の心も同じです。いつもは陽気な親でも、体調や家族の中で心配なことがあった時は、表情が曇ります。そういう大人の事情は理解しやすいのですが、子どものことになるとついつい「7ヶ月になったらハイハイするもの」「3歳過ぎて、卒乳できていないのは、遅すぎる」等、定型発達の枠に縛られてしまいがちです。

支援の基本は、相手の価値観や生き方の多様性を知って、それに合わせた支援の内容や方法を選択することです。

1つのできごとの見方で、あなたはどこに注目しますか？



人が行動する時のことを考える方法として、この3つの箱を使って考えるやり方をABC分析といいます。(A: Antecedent B: Behavior C: Consequence)

人の行動には、ほとんどの場合は理由があり、行動を行う前にはきっかけがあり、そして、行動が起こった後には何らかの結果がついてきます。大人が、子どもの行動を見る時は、ついつい結果だけを見て、その前の「行動」や「きっかけ」の部分に気づかないことが多いのです。例えば、きょうだいで遊んでいると、お母さんはその間家事に集中しているでしょう。でも、下の子が泣くとそばに行って、下の子をあやしたり、上の子に「何があったの」と理由を聞いたり、「いじめちゃだめ」と叱ったりするのではないのでしょうか。結果にだけ注目していると、「終わりよければすべてよし」となり、プロセスがおざなりになってしまうことがあるので気をつけましょう。

頭を柔らかくして、いろいろな状況から、行動の意味を考え、結果が予測できればあなたは、素晴らしい「心の天気予報士」です。

では、1つ練習してみましょう。

「赤ちゃんがベビーベットで泣いている」時、そのきっかけ(原因)は何でしょう。



きっかけ：行動を起こす理由には、①生物的要因（ねむい・おなかがすいた）
②社会的要因（かまってほしい・しずかにして）
③物理的要因（ふとんが柔らかすぎる・まぶしい）

あなたは、いくつの「きっかけ」を思いつきましたか。

①は、思いつきやすいのですが、なかなか②や③に気づきにくいことがあります。特に②は、最初に「結果」があり、それを期待して引き起こされた「行動」なのかもしれません。そうです、それが「抱き癖」と呼ばれるもので、「泣いたら、お母さんがたっこしてくれる」ということを学習した赤ちゃんは、お母さんがそばを通ると泣くという行動ができるようになるということです。反対に、「泣いても抱っこしてもらえない」ということを学習した赤ちゃんは、だんだん泣くことをやめてしまうということも言われています。また、赤ちゃんが熱いスूपに手を伸ばした時は、すぐに「行動」に注目して、赤ちゃんを遠ざけるか、スूपを手の届かないところに移すかしないといけませんね。3つの箱の1つにだけ心をむけるのではなく、常に3つの関係を考えて、今どこに働きかけることがよいのかを考えることが大切なかもしれません。

（参考：育てにくい子に悩む保護者サポートブック 高山恵子監修）



1. 子育て家庭支援の基本姿勢

会話のペースを合わせよう

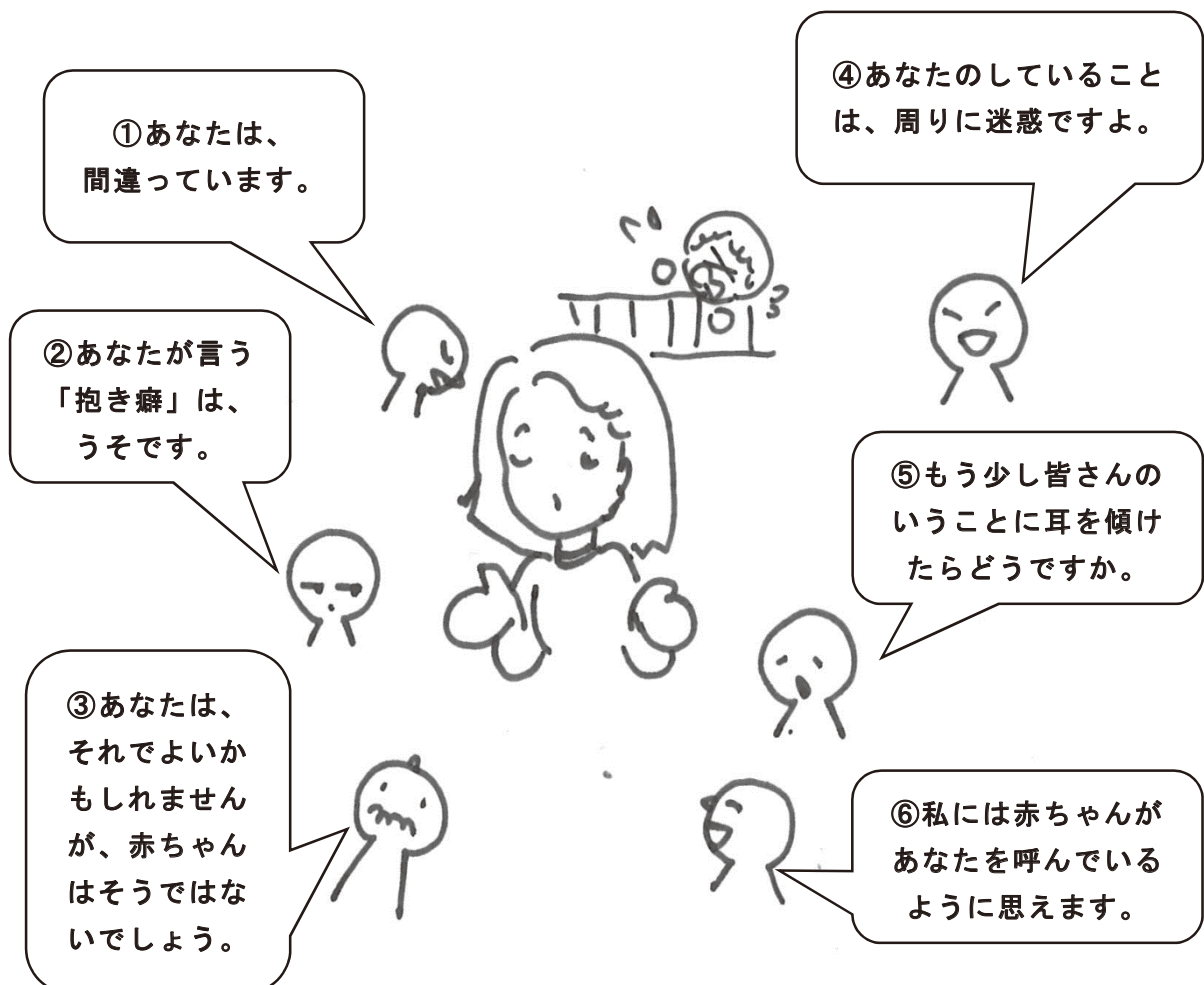
育児の主体者は？もちろん、保護者です。そこで、大切なことは、

- ①望ましい保護者像・子ども像を押し付けない
- ②できないことをやってあげるのではない
- ③保護者を蚊帳の外にしない

の3つがポイントです。

ここでは、保護者とのよりよいコミュニケーションについて、考えましょう。
あなたは、日ごろどんな話し方をしますか？
例えば、次のような場面です。

場面1：泣いている赤ちゃんに、「抱き癖がつくから」と無視するお母さんに対して



では、確認してみましょう。どのパターンがよいか○を付けてください。

保護者とのよりよいコミュニケーションは

- () 命令型コミュニケーション（パワーの関係）
- () 説得型コミュニケーション（結論が先決）
- () 対話型コミュニケーション（傾聴・共感・対等）

まとめると、次のようなことがポイントです。

・聴き方

- ◇話をしている相手への関心を態度で表現しましょう。
（相づちの間も大切です）
- ◇話を途中で遮らず、話の内容に注意をむけましょう。
- ◇相手の話に価値判断や批判するような発言をはさまないようにしましょう。
- ◇身体言語・特にアイコンタクトなどでは、文化的な違いに配慮しましょう。

・話し方

- 相手に合わせて、声の大きさや早さを意識して話しましょう。
- 誰かを攻撃したり批判したりする言動は避けましょう。
- 他人の気持ちの代弁ではなく、自分の気持ちを伝えましょう。
（アイ・メッセージ）
- 自分の立場で伝えられることの限界を意識しておきましょう。
- 否定するのではなく、相手の激高した表現を中立的な表現に言い換える技術を磨きましょう。

➡この違いに気をつけて！！

感情の移入
人間の相互性
価値の多様化
文化相対主義
相手を尊重

共感 vs 同情

感情のシンクロ
人間の類似性
価値の単一化
自文化中心主義
自分を尊重

2. 親子が心地よく過ごす場所づくり

親子が気軽に立ち寄れる工夫

📖 見え方が違うよ！



ぼくの名前は、「こそだて げんき」です。2歳になったんだよ！

今日は、おかあさんと一緒に、子育て支援ルームに遊びに来ています。

あれっ？おかあさんとぼくとでは、見え方が違うんだね。

📷 おかあさんから見たところ

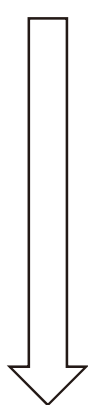


ここが、入り口なのね！
看板があるから分かりやすいわ。

📷 げんきくんから見たところ



あれっ？門が閉まっているけど、
ここはどこ？



くまさんがいるよ！入ってみたいなー！

このようにすると！

ポイント！

子どもが好きな
アイテムを視線の
先に置くと
入りやすい。



靴箱も屈まなくて入れられる
から妊娠中も安心だわ。



こんな置き方
もあるよ

子ども用靴箱の横に椅子がある！靴
箱も低いから自分で靴を出せるよ。

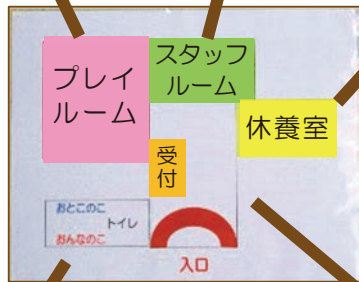
☆プレイルーム
楽しそうな おもちゃがいっぱいあるね。



☆スタッフルーム
スタッフの人がいるお部屋かな？机があるから、お勉強をするとところかな？



☆休養室（授乳室）
ソファがあるから、お母さんもゆっくり授乳ができるね。



絵が貼ってあるから、ぼくにも分かる。
椅子があるから自分でパンツがはけるよ！



可愛い絵がいっぱい！
貼って剥がして遊べるよ。



さあ！門をくぐって中に入るよ！

どこ行こうかな？

**入ると直ぐに受付
があった。**

**部屋の案内板が貼ってあるから
分かりやすいな。**



初めて訪れる場所は、誰もが不安です。そんな時、スタッフの笑顔と道しるべ（絵と文字で示した案内表示）があると安心ですね。どんな配慮が必要かな？と思った時には、自分が利用する立場になって施設を探検してみると、良いアイデアが浮かんでくるかもしれませんね。

2. 親子が心地よく過ごす場所づくり

施設の中を探検しよう！

施設の中は、親子が過ごしやすいように工夫がされています。四季が感じられるように壁面の飾りを変えたり、おもちゃも入れ換えたりと施設ごとに、スタッフのアイディアが活かされているのではないのでしょうか。

そして、一番大切なことは、子どもの発達に沿ったおもちゃ選びと、部屋の環境構成です。子どもの動きを考えて設定された環境は、居心地の良い、落ち着いた遊びが持続することでしょう。



ほくの名前、覚えている？ こそだて げんきです！
今から、ほくと一緒に施設の中を探検しよう！
どんなところか、楽しみだな！



子どもたちはどんな場所に興味があるのでしょうか？子どもたちの遊びを追っていくと、意外な発見がありますよ。



ポイント A

あれっ？

こんなところで遊んでいる友だちを見つけたよ！

☆段差を生かした遊び

子どもにとっては、歩くこと自体が遊びです。歩行し始めは、両手でバランスを取り、全身の力を使って全力で歩くようになります。そして、自分を取り巻く環境に対して、自分から働きかけて刺激を生み出します。

この子どもにとって、段差を越えることが、今一番、楽しい遊びです。



.....



歩くことに慣れてくると、物を使っての移動に、挑戦し始めます。

これは、バギーの車輪を上手く使って、段差を上っているところです。子どもにとっては、遊びながら様々なことを学んでいくんですね。

.....

こちらは、おもちゃ棚の段差を利用して、線路を作っていますね。大人は、陸橋が片方しかない、もう片方を探しますが、子どもは身近にあるものを上手く利用して遊びます。子どもの発想は面白いですね。



.....



子どもと遊ぶときは、遊んでいるしぐさや顔が見たくて、床に座ったまま前かがみになり、腰が痛くなったり、足が痺れたりした経験はありませんか？ 特に、おなかの大きくなったお母さんにとっては大変ですね。

また、子ども用の椅子に座るには、ちょっとお尻が・・・という経験もあるのではないのでしょうか？

段差は、危険な場所ではなく、大人にとっても、子どもにとっても、便利なところですね。

お母さんたちも段差があると嬉しいですね！





ポイントB

部屋の中に坂道があるよ！
危なくないのかな？

☆坂道を生かした遊び



坂道など、大きく手足を動かせる場所に、子どもは魅力を感じるようです。少し重さのある物を押したり、引いたり出来るようになると、平坦な道ではなく、坂道のような力と両手足のバランスが必要な場所に遊びが移行します。

そして、繰り返し遊ぶことで、力の加減を身に着けていくのでしょう。

活動欲求を充たすためには、部屋の中にも凹凸や素材の違うマットを用意しても楽しいですね。



.....

ポイントC

おもしろそうなトンネルを見つけたよ！
ほくも一緒に遊びたいなー



☆トンネルを生かした遊び



子どもたちは、狭い場所が大好きです。「こんなところを通れるのかな？」と、大人が思うところでも、繰り返し挑戦しながら、自分の能力にあった解決方法を見い出していきます。

子どもは、遊びによって環境を理解し、環境に合わせた自己の調整能力を獲得します。

この時、子どもたちは、五感をフルに活用するとともに、自己を守る感覚も磨くことができます。



.....



ポイントD

あれっ？
布を投げてると思ったら、入れ物から出して遊んでたんだね。

☆出したい入りたいする遊び

1歳ごろになると、手にした物をあちこちに投げる行為がみられます。子どもが腕の大きな動きを必要としている、粗大運動の機能が発達する敏感期であると思われます。この時期には、布やボールなど、投げるものを準備してあげると良いでしょう。

子どもは、腕を動かす機能を獲得してしまうと無駄に腕を動かさなくなります。



ポイントE

きれいな音が聞こえてくるよ！
おもしろそうな楽器がいっぱいあるね。



☆音場(楽器コーナー)

子どもたちは、音に敏感です。

「子どもが人生で初めて出会う楽器だからこそ正確で美しい音色でなければならない」と、ある制作会社は提言しています。

その言葉のとおり、「子どものおもちゃだからこの程度で」と誤魔化すのではなく「本物の楽器」を与えることで、音に対する美的感覚が育ちますよ。



.....

ポイントF



何してるのかな？ サラサラ気持ちよさそう♪
こんなところに、絵が描けるんだ。
おもしろそう！ほくも一緒に描きたいな！

☆砂場



砂の上に絵を描いて、「これ、なーんだ！」と、問題を出し合うふたり。「さかな？」「あたり！」「つぎは・・・」と言いながら、絵を消していく。描いたり消したり、自由自在に変わる砂のキャンパス。

子どもたちは、このように、自然に触れながら、感動する心や柔軟な感性を育てていくのでしょうか。初めて砂に触れる時は、大人たちが、「気持ちいいね！」と言葉がけながら、一緒に触れてあげてください。初めて体験する時は、無理をしないでね。



.....

子どもの遊び環境の中には、「子どもを遊んでくれるもの」と、「子ども自身が遊びをつくり出すもの」とがあります。「子どもを遊んでくれるもの」とは、一方的に音を出して動くおもちゃなど、新奇性に惹かれますが、すぐに飽きてしまうものです。では、「子ども自身が遊びをつくり出すもの」とは、どのようなものでしょうか。

施設の中を探検して気づかれたと思いますが、触るとサラサラ気持ちよく、山を作って乱暴に叩くと崩れ、そーっと触ると崩れない・・・ポイントFの砂場です。砂のように、子どもの行動に応答してくれる物が、「子ども自身が遊びをつくり出すもの」です。他にも、土・水・植物など自然の素材です。素材が豊富であり、いろいろな用途に変化する多様性を持っており、応答性があるもの。このような素材が、施設に多くあると、親子の遊びも楽しくなるのではないのでしょうか。

2. 親子が心地よく過ごす場所づくり

季節ごとの手づくりコーナー

支援ルームに遊びに来た子どもたちは、安心できる大人に見守られ、思い思いの場所で遊びに夢中です。例えば、お母さんと一緒に線路を作って、汽車を走らせている途中に、「親子でクリスマスの飾りをつくりますよ！」と言われても、子どもにとっては、「もうちょっと、お母さんと汽車遊びをしたいよー」となります。せっかくの楽しいイベントも、楽しさが半減してしまいます。

では、「子どもたちの遊びが満足した時に」「子どもが興味を持った時に」というように、子どもの生活に合わせたイベントはできないのでしょうか？

大丈夫です！そんな時は、一斉に始めるのではなく、いつでも出来るように、部屋の一角を、ミニイベントコーナーとしてセッティングしてしまってもいいですか？「手づくりコーナー」と命名して、季節ごとの飾りやプレゼントづくりをしても楽しいですよ。

☆フェルトを使って…



母の日には、バラの花を
プレゼント！

子ども中心のイベント
は、あるんだけど…
親が楽しめて、子どもも
楽しめる製作企画って、
なかなか無いですね。

ありますよ！



☆どんぐりを使って・・・



秋には、どんぐりで「トトロと仲間たち」を制作



冬には、コットンとモールを飾って、「サンタとトトロの仲間たち」に变身



同じ材料を使っても、季節を感じる素材を足すことで、1年中飾れますよ！

☆マカロニを使って・・・

クリスマスのリースづくり
— 材料 —
マカロニ
(いろいろな形のもの)
ボンド
リース型に切った型紙
スプレー (金や銀)
リボンなど



お料理に使って残ったマカロニがあれば、直ぐにできますよ。一度作っておくと、リボンを変えたり、スプレーの色を変えるだけで、新しく作ったように見えます。

また、南天や裏白を飾ると、お正月飾りにもなりますよ。

このように、一斉に始めなくても出来るアイテムはたくさんあります。ちょっとした工夫で、親子が無理なく楽しめる時間をつくってあげる事も、スタッフの役割ではないでしょうか。

利用者の声に耳を傾けてみましょう！きっと良いアイデアが浮かぶと思いますよ。

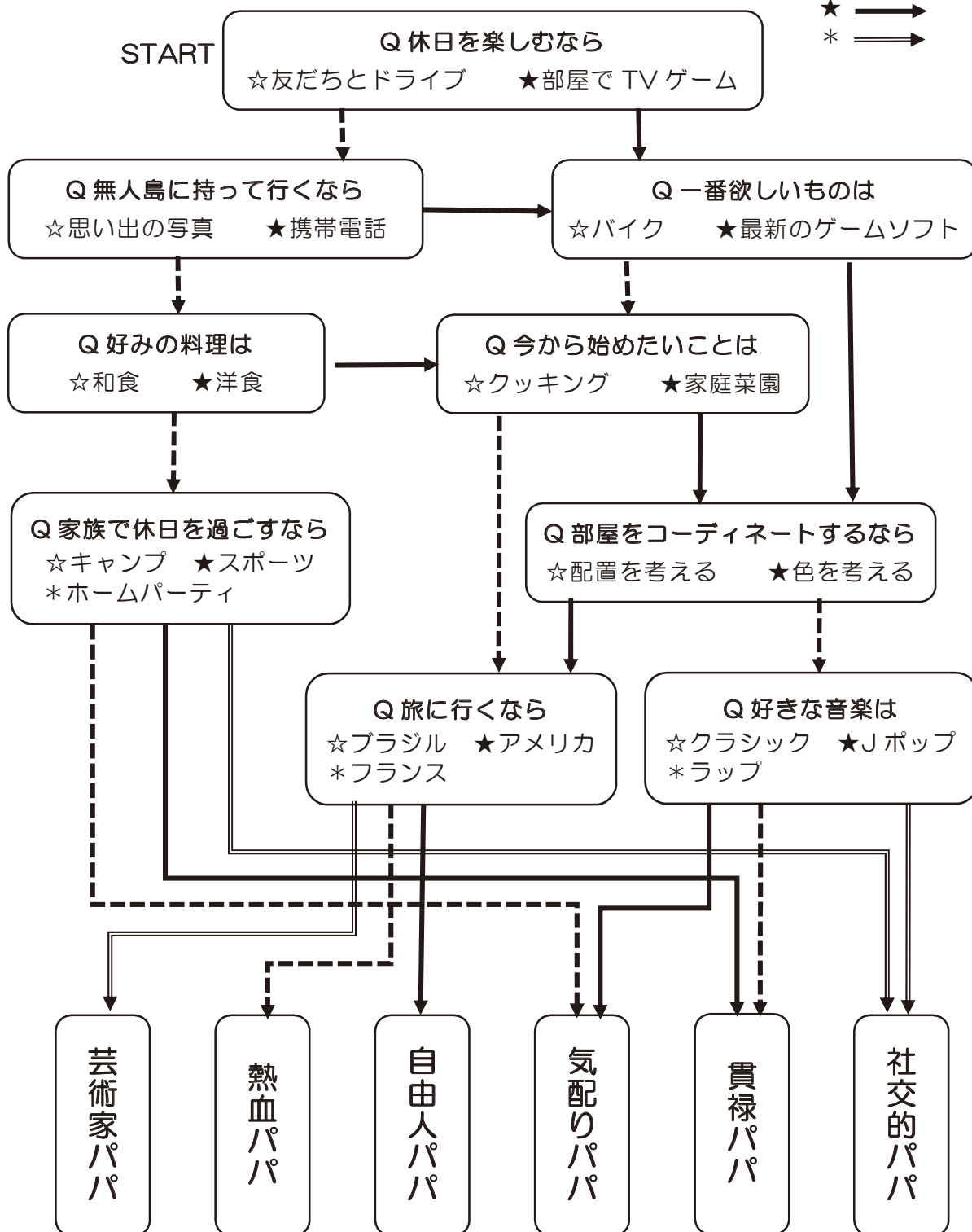
2. 親子が心地よく過ごす場所づくり

タイプ別パパの子育てアイテム

チャートでわかるパパタイプ

質問に答えて診断スタート！

☆ --->
★ ==>
* ==>



あなたはどんなパパだった？



芸術家パパ

芸術肌のお洒落さん。

★そんなパパには・・・

カメラ片手に
家族揃ってお散歩へ！

→アイテム1(P28)へ



気配りパパ

まじめで優しい存在。

ママの強い味方。

★そんなパパには・・・

おもちゃの世界で
エンジョイ育児！

→アイテム4(P31)へ

熱血パパ

完璧な子育てを目指す

炎のイクメン。

頑張りすぎて、

失敗しても落ち込まないで。

★そんなパパには・・・

親子一緒に
スポーツを楽しもう！

→アイテム2(P29)へ

貫禄パパ

何事もぬかりなく対処。

でも、冷静すぎて

周りとの温度差に要注意。

★そんなパパには・・・

親子一緒に絵本タイム！

→アイテム5(P32)へ

自由人パパ

育児中でも

自分の時間は譲れない。

興味があればまっしぐら。

★そんなパパには・・・

興味を子育てに活かそう！

→アイテム3(P30)へ

社交的パパ

いつも明るい性格で

子育て向き。

周りの協力を得るのも上手。

★そんなパパには・・・

サークル活動で、
自分の力を発揮しよう！

→アイテム6(P33)へ



アイテム1:カメラで記録

「今だけ」の瞬間を記録しよう！

子どもは散歩が大好きです。自然に触れ、心もウキウキ、表情も豊かになることでしょう。そんな瞬間を写真に記録しておく、感動が後々まで続きますよ。

また、家族で出かけた時は、子どもが泣いてもお母さんがいるから安心です。しかし、お父さんしかいない時、子どもが泣き出したらどうしますか？

そんな時も、カメラを子どもに向けてやると「何故か？」泣き止むこともあります。子どもは、少し気分を変えたり、環境の変化があると、機嫌が直るんですね。

📖 子どもを連れて散歩に行くときは、カメラを持って行くと良いことがいっぱい！



このアングル最高！
友だちに見せて
自慢するぞ～

○月○日○曜日
息子の公園デビュー
笑顔が可愛かったよ

①

②

パパの嬉しかった瞬間！



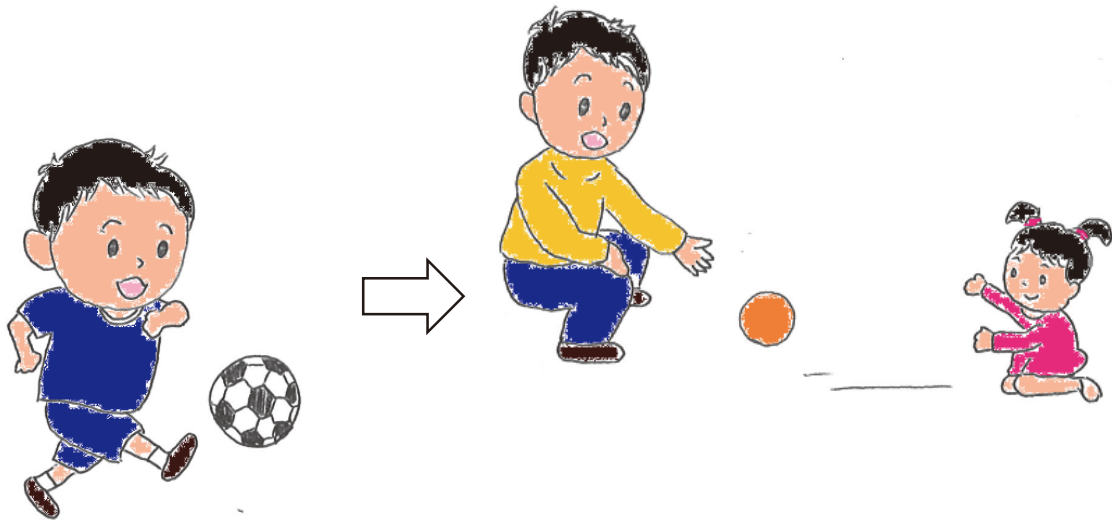
アイテム 2: スポーツ

「同じ」道具や動きで子どもと楽しもう！

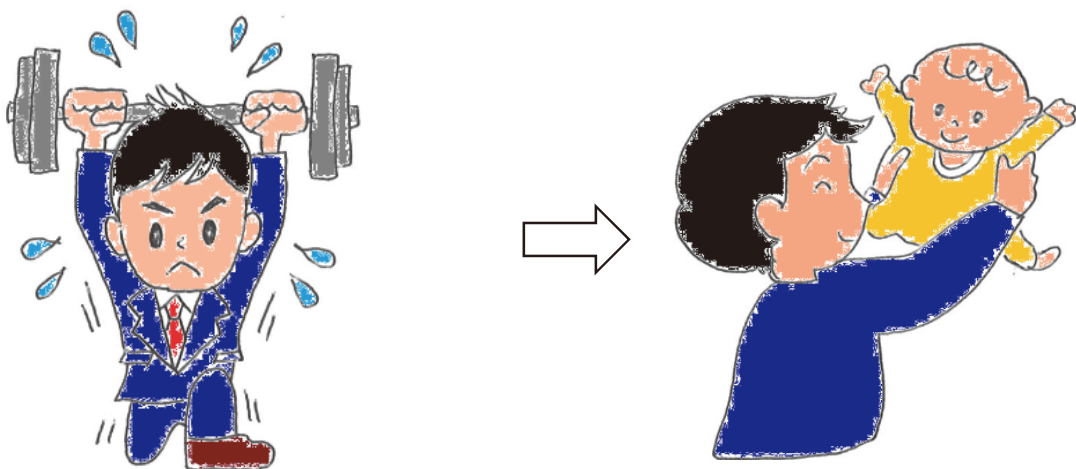
「子どもと一緒に遊びたいんだけど、何をしたら良いのか分からない」と、悩まれているお父さんも多いのではないのでしょうか？

自分の趣味を活かし、少し方法を変えるだけで、子どもにとって楽しい遊びに変化しますよ。

📖 ボールは蹴らずに転がして！



📖 ダンベル運動？いえいえ、子どもを両手に「たかい、たか〜い」



この他にも、「腹筋をするなら、子どもを膝に乗せて、ユラユラゆりかご」など、いろいろなアイデアが見つかるかもしれませんね。

アイテム 3: 木製パズル制作

世界に 1 つだけの木製パズルづくり！

📖 自分の子どもの発達年齢に合ったパズル。既製品ではない、心のこもったアイテムです。

・既製品のパズルは・・・

子どもが好きな絵のパズルだけど、ピースが多くて難しそう
子どもが成長したので、もっと難しいパズルが欲しい



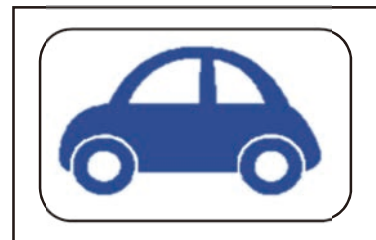
・手づくりパズルは・・・

子どもの発達年齢にあったピースにできる
成長するとピースが増やせる
好きな絵で作れる
好きな型にできる
木製にすると手触りが良い・長持ちする



☆準備する物（例）

- ◆ パズル板
- ◆ 貼っても剥がせるのりスプレー
- ◆ イラスト（子どもの好きな絵）
- ◆ カーボン（絵を板に写す）
- ◆ 絵を描くもの（コンテ・絵の具・マーカー等）
- ◆ 木工用ボンド
- ◆ ニススプレー
- ◆ 電動のこぎり
- ◆ 紙ヤスリ
- ◆ 鉛筆等

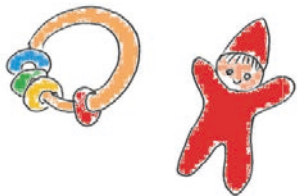


アイテム 4: おもちゃ

発達年齢にあった おもちゃ選び

0～3 か月頃

☆舐めたり握ったり楽しむ



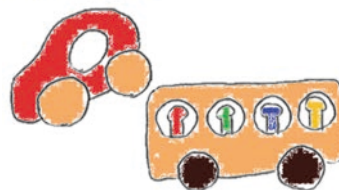
4～6 か月頃

☆自分で触って音を楽しむ



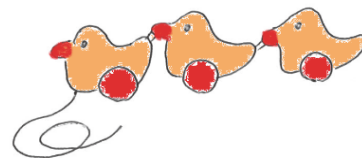
7～9 か月頃

☆動きを楽しむ



10～12 か月頃

☆引っ張って楽しむ



3 歳頃

☆ごっこ遊びを楽しむ



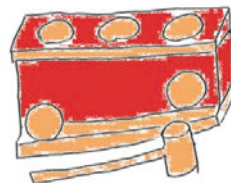
2 歳頃

☆自由に組み合わせて遊ぶ
事を楽しむ



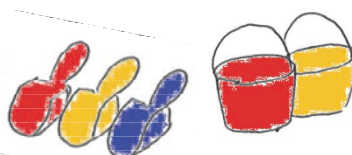
1 歳～1 歳半頃

☆目的の場所を叩いて楽しむ



1 歳半～2 歳頃

☆つまむ・運ぶを楽しむ



アイテム5:絵本

パパの優しい声で絵本タイム

- 📖 子どもは何でも知りたがりです。自分から気づくこと・感じる事が成長には大切です。絵本の世界で、親子一緒に様々な体験をするのも楽しいですよ。
- 📖 4～5か月頃までは、わらべうたのような大人の心地よい声の体験と、肌の触れ合いが大切です。ファーストブックは、この時期以降が良いでしょう。

6か月から

探索活動が活発になり、
指差しや模倣を始める時期
『いない いないばあ』
『おつきさまこんばんは』
『きゅっきゅっきゅっ』他

1歳から

物を出したり入れたり、
押して歩く遊びを好む時期
『おててがでたよ』
『くつつあるけ』
『がたんごとな
がたんごとな』他



1歳半から

大人の言葉を真似たり、
くり返したりして遊ぶ事を
好む時期
『いただきます』
『こんにちは』『くだもの』
『ころころころ』他

2歳から

語彙が増え、みたて・ふり
遊びを始める時期
『きんぎょがにげた』
『たまごのあかちゃん』
『おかあさんといっしょ』
『おにぎり』他

3歳から

話し言葉の基礎ができ、
役割遊びが始まる時期
『おおきなかぶ』
『ぞうくんのさんぽ』
『三びきのやぎの がらが
らどん』『ぐりとぐら』他

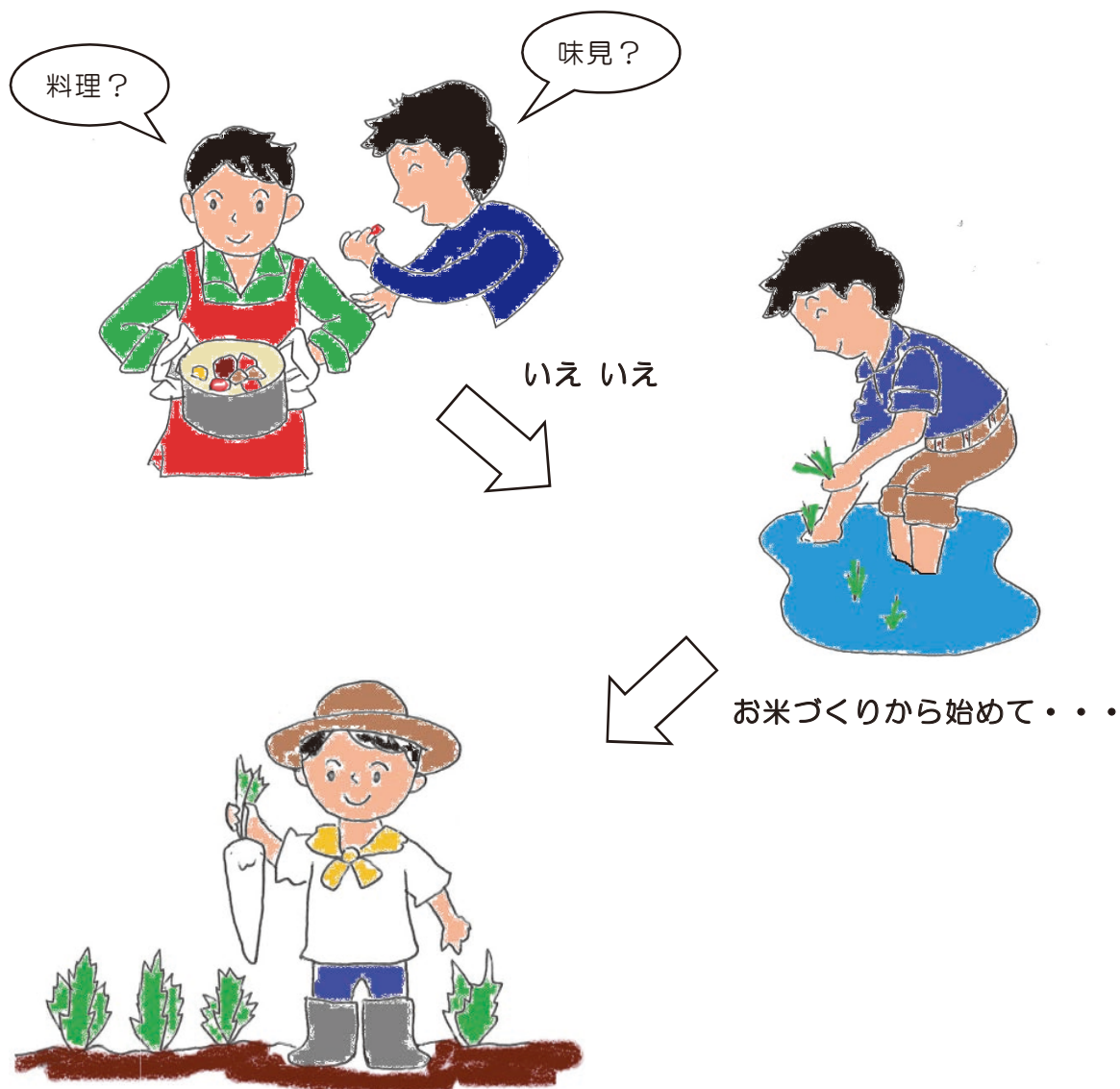
2歳半から

ごっこ遊びが始まり、自
分の欲求を言葉で表す時期
『はけたよ はけたよ』
『さんぽのしるし』
『パンツのはきかた』
『もこ もこもこ』他

アイテム 6: サークル活動

仲間と一緒に子育て応援

📖 ひとりでは難しくても、みんなが集まれば！



畑を耕して野菜づくりにも挑戦



みんなで作った野菜は美味しいよ！

2. 親子が心地よく過ごす場所づくり

見やすい おたよりづくりの工夫

みなさんは、どのような手段で、利用者の方に情報を提供されていますか？
近年は情報化社会により、知りたい内容を、いつでも・どこでも、携帯やパソコンから検索できるようになりました。そこで、利用者に伝える方法として、ほとんどの施設ではホームページを開設し、イベントの内容やスケジュールを掲載されるようになってきました。また、独自の「おたより」を発行している施設もあります。

では、利用者にとって「分かりやすい」、「もう一度読んでみたい」と思う「おたより」とは、どのようなものでしょう。ここでは、ある施設の「おたより」を例にして、解説します。



☆スタッフの得意分野を活かして、「簡単レシピ」や「季節の歌やわらべうた遊び」「行事にあわせた絵本紹介」など、シリーズで書くと、毎月読むのが楽しみになりますね。

くーちゃんの

「絵本のいりぐち」

今月の10日(日)は母の日です。そこで、「絵本のいりぐち」では、母の日にちなんだ絵本を紹介したいと思います。

1冊目は、にしもとよう作『うまれてきてくれてありがとう』です。

「ぼくは、ママをさがしているの。かみさまが、『うまれていいよ』っていつてくれたから・・・」
ぼくはママに会いたくて、抱きしめてもらいたくて、ママを探し続けます。「あなたは世界でたった一人のかけがえのない存在。うまれてきてくれてありがとう。」素敵な言葉ですね。

そして、2冊目は、アリスン・マギー作、ながわちひろ訳『ちいさなあなたへ』です。

母になってわかる事、母にならなくてもわかる事、同じ位たくさんあります。でも、生まれてきたわが子を見ると、赤ちゃんの小ささを知り、赤ちゃんの体温を知ります。そして、そうやって生まれてきた自分を知り、育ててくれた母をも知るようになります。読む人の心を、それぞれに映し出してくれる絵本なのかもしれませんね。

この他にも、『あやちゃんのうまれたひ』『ちょっとだけ』『おかあさんがおかあさんになった日』があります。乳幼児に読み聞かせるには難しいですが、お母さん方の「絵本のいりぐち」にお薦めします。

月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
属幼…附属幼稚園の行事 ※今年度から附属幼稚園が行っているイベントも掲載しています。			30	01	02	03憲法記念日
みどりの日	05こどもの日	06振替休日	07 開室日	08	09	10 母の日
開室日	12 開室日	13 附属幼稚園 子育て広場	14 開室日	15	16	17
開室日	19 開室日 すくすく子育て	20	21 開室日	22	23	24
開室日	26 開室日	27 附属幼稚園 子育て広場	28 開室日 わくわくデー	29	30	31

☆カレンダーは見た目も分かりやすいように、必要なことを、ワンポイントで書く。

長期の休日は、年度初めに知らせる方がよい。また、変更があった時は、ラインを引くなど分かりやすく知らせる。

また、色分けしても見やすいかもしれませんね。

☆今月の予定(日時と場所)など、簡単に書く。

☆来月の予定(日時と場所)など、前もって利用者が予定を立てやすいよう知らせる。

「すくすく子育て」の予定

◇ 5月19日(火) 10:30~
「子育てについて語ろう!」
講師:兵庫教育大学 石野秀明 准教授
◇ 6月には、元附属幼稚園園長でもあります、横川和章先生をお迎えいたします。
お楽しみに。

「わくわくデー」の予定

◇ 5月28日(木) 10:30~ 0・1歳児
11:00~ 2・3歳児
まちの寺子屋師範塾「どんぐり」の皆さんと一緒に、わらべうた遊びを楽しんでください。
◇ 6月には、大学の吹奏楽部のお姉さんが、楽しい曲を奏でてくれますよ。
お楽しみに!

お知らせ

◇ 「GENKI」受付前の廊下の補修工事
5月9日(土)~5月17日(日)の間は、支援ルーム北側にあるウッドデッキの入り口になります。階段を設けており、小さいお子様と上られる時は、お気を付けてください。
尚、雨天の場合は従来通り入り口から入ってください。

お問い合わせ

子育て支援ルーム「GENKI-げんき-」
〒673-1421
加東市山国 2007-109 やまくにプラザ1F
電話&FAX: (0795) 40-2231
HP: <http://www.hyogo-u.ac.jp/preken/genki/>

☆変更がある時は、目立つように枠で囲んで知らせる。

問い合わせ先(施設の住所・電話番号など)を、文末に入れる。

「おたより」作成時のポイント!

1. シリーズになっている内容の記事は、毎月、同じ場所を書くで見やすい。
2. カレンダーには、多く書き込みすぎない。ポイントのみ記入する。
3. スタッフで担当を決めて書くことで、内容が偏らない。
4. 前月の報告と、今月の予定は必ず入れる。
5. コラムには、その施設での親子の様子を書くと、オリジナリティがでる。

2. 親子が心地よく過ごす場所づくり

感染や事故を防ごう

子どもは、成長・発達過程で環境に対して様々な働きかけを行い、運動能力を獲得していきます。高いところへ登ってみたり、つまずいて転んだり、小さなけがや病気を繰り返しながら成長します。

そのような中で、支援者は、「事故はいつでも、どこでも起こり得る」ものとして、あらゆる事故を想定し、日頃から予防対策に取り組んでいかなければいけません。

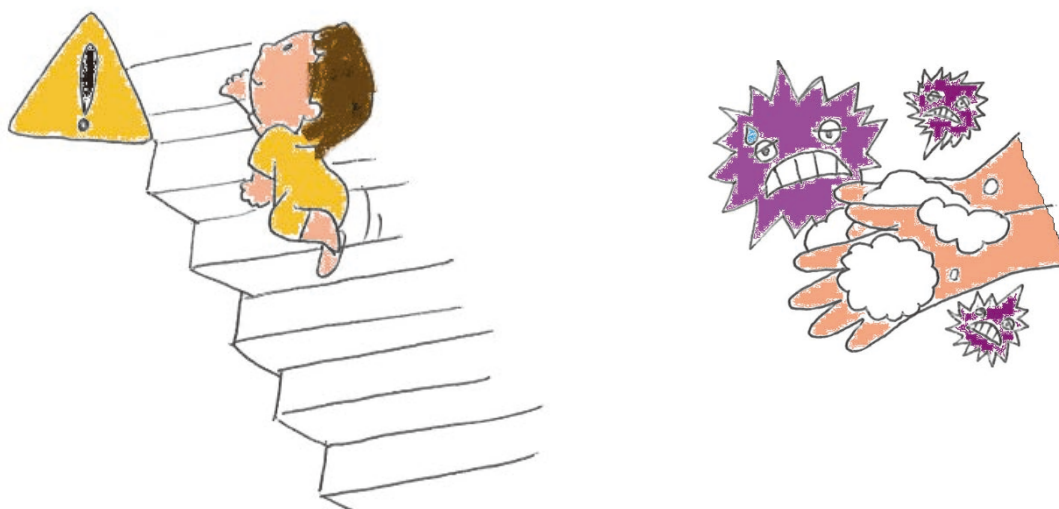
また、予防対策と併せて、万が一事故が起こった場合に、被害を最小限に食い止めるため、「いつ、誰が、何をするのか」を明確にした、適切かつ速やかな対応方法も盛り込んだ独自の事故対応マニュアルを作成する必要があります。

チェックポイント 25

No	内 容	チェック
4か月		
1	ベビー用品は月齢や使用目的にあったものを選び、取り扱い説明書をよく読んでいますか。	
2	ベビーベッドの柵はいつも上げていますか。	
3	赤ちゃんを抱いたり、おぶったりするときは、周囲にぶつかる危険な所がないか確認をしていますか。	
4	赤ちゃんを抱いているとき、自分の足元に注意していますか。	
5	赤ちゃんの指がドアに触れていないのを確認してから開閉を行っていますか。	
6	ベビーベッドの柵とマットレスの間にすき間がありますか。	
9～10か月		
7	赤ちゃんがつかまり立ちをしたり、つたい歩きをしたりするときは、そばについて見えていますか。	
8	階段の上下階の両側に転落防止用の柵を取り付けていますか。	
9	子ども用の椅子は安定のよいものを使用していますか。	
10	テーブルクロスを使用していますか。	
11	家具などの角の鋭い部分には、クッションなどでガードがしてありますか。	

1 歳 6 か月		
12	子どもが遊んでいる周囲に、つまずきやすい物や段差がないか注意をしていますか。	
13	階段を昇り降りするときは、大人がいつも子どもの下側を歩くか、手をつないでいますか。	
14	子どもの位置を確認してからドアを開けていますか。	
15	子どもの腕を強く引っ張ることがありますか。	
16	医薬品、洗剤などは子どもの手の届かない所に置いていますか。	
17	子どもが鼻や耳に小物を入れて遊んでいることがありますか。	
18	子どもが引き出しやドアを開け閉めして遊んでいることがありますか。	
3 歳		
19	子どもが外遊びをするとき、つまずきやすい物や段差がないか注意していますか。	
20	いつも子どものいる位置を確認していますか。	
21	ベランダや窓のそばに踏み台になるものがありますか。	
22	おもちゃで遊んでいるとき、危険なことをしていないか確認をしていますか。	
23	医薬品、洗剤などは子どもの手の届かない所に置いていますか。	
24	子どもが鼻や耳に小物を入れて遊んでいることがありますか。	
25	水遊びをするときは必ず大人が付き添っていますか。	

参考：家庭的保育研究会「家庭的保育の基本と実践 家庭的保育基礎研修テキスト」福村出版
田中哲郎(2011)『保育園における事故防止と安全管理』日本小児医事出版社



3. 地域連携

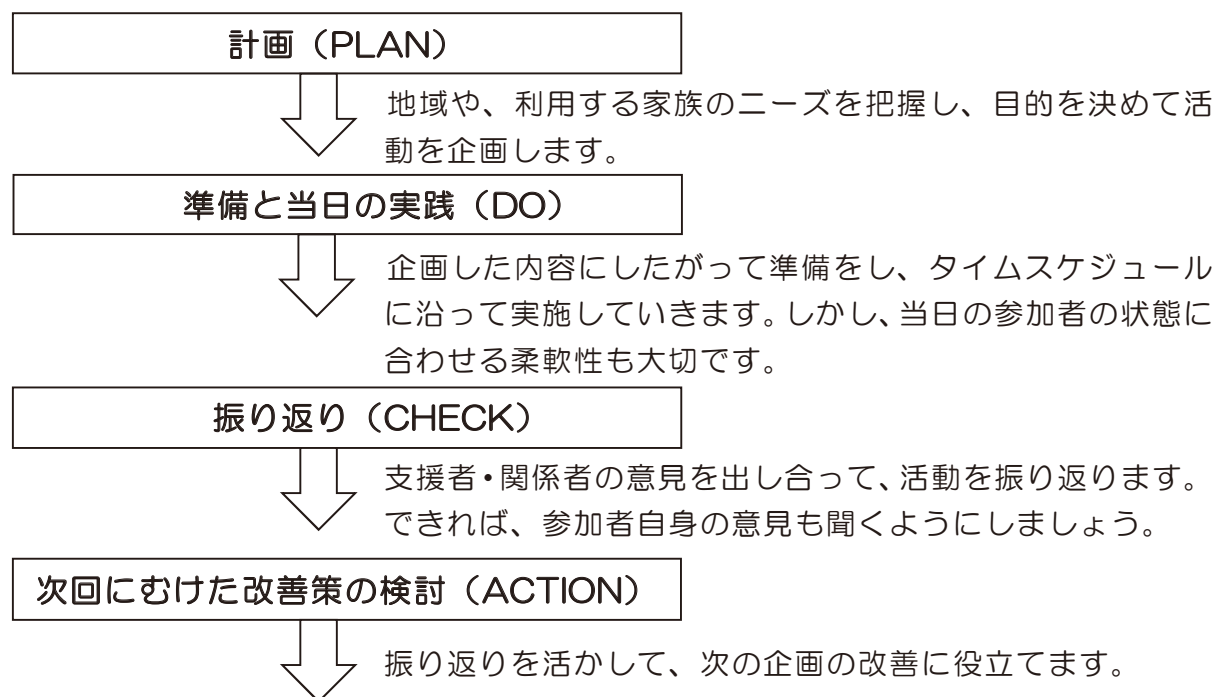
親子が楽しく参加できるプログラム

子育て支援の場には、来室した親子が自由に過ごす遊びの場の提供というノンプログラム型の活動と、支援者が講演やイベントなど、何らかの活動を用意して参加者を迎えるプログラム型の活動があります。

子育てに関する講演のほか、親子で活動するリトミックやわらべ歌遊び、赤ちゃん向けのベビーマッサージなど参加型のプログラムが人気です。ただ、こうしたイベントを組むと、参加する親子が多くなり、プログラムを企画したスタッフも活動をやり遂げたという充実感を得やすいのですが、親同士の交流が持ちにくく、つながりが持ちにくいということがあります。また、「何かをしてもらう」という受け身の育児スタイルを定着させ、知らず知らずのうちに「今日はここのイベントに」「明日は、あちらの絵本の会に」など、親子がイベントを渡り歩き、それで子どもと遊んでやったという違う満足感を持たせてしまうことにもなりかねません。

そこで、プログラム型の活動の場合は、PDCA サイクルで取り組むことが大切です。

※PDCA サイクルとは、エドワード・デミングが提示した計画（PLAN）➡実行（DO）➡ふりかえり（CHECK）➡改善（ACTION）というマネジメントサイクルのことです。



※固定的なプログラムのない支援場所でも、1日に1回程度10分位親子で輪になって手遊びをしたり、絵本の読み聞かせをしたりするところもあります。最後に一緒に何かすることで活動のリズムをつくりその場への帰属意識を高めることがねらいです。

（参考：よくわかる子育て支援・家庭支援論 大豆生田啓友編）

プログラムの3つのポイント

プログラムは、親が子どもと関わるのが楽しいと思えたり、自信を持って子育てに取り組めたりするようになる「子育てのプロセス」を応援するものです。

そこで、以下のようなポイントに気を付けて、実施するようにしましょう。

ポイント1：プログラムの内容

- ①家に帰って、自分が活用できる
- ②親子の初めての体験を支援する
- ③日常的な関係づくりにつながる
- ④親の気持ちが軽くなるような効果がある
- ⑤育児に対して、見通しが持てる

ポイント2：活動対象の選定

①親子が一緒に参加する場合

子どもの年齢に応じて、グループの人数を調整
子どもの年齢を同年齢にするか、異年齢にするか
きょうだいで参加する場合のサポート体制

②親子別々の活動を企画した場合

親子が離れて大丈夫な時間の設定
不安がる子どもへのサポート体制

（よく一緒に遊び、子どもが安心していられる友達の親についてもらうのも1つの方法です）

ポイント3：利用している親にもプログラムに参画してもらう

親自身がやってみたい活動を取り上げ、主になって参加してもらう
孤立しがちな人を経験のある人とペアにするなど、入しやすい工夫をする
反対に、参加したくない親子にもホッとできる場所を用意する

（例） 企画シート

活動タイトル	
目的	
内容	
活動者	
日時・回数	
場所	
役割分担	
広報の仕方	
協力依頼する組織・地域	

（例） 当日のタイムスケジュール

時間	内容	準備物	留意点
	準備・参加者調整		
	（アイスブレイク） 紹介		
	（メインプログラム）		
	（サブプログラム）		
	まとめ・振り返り		
	片付け・スタッフの振り返り		

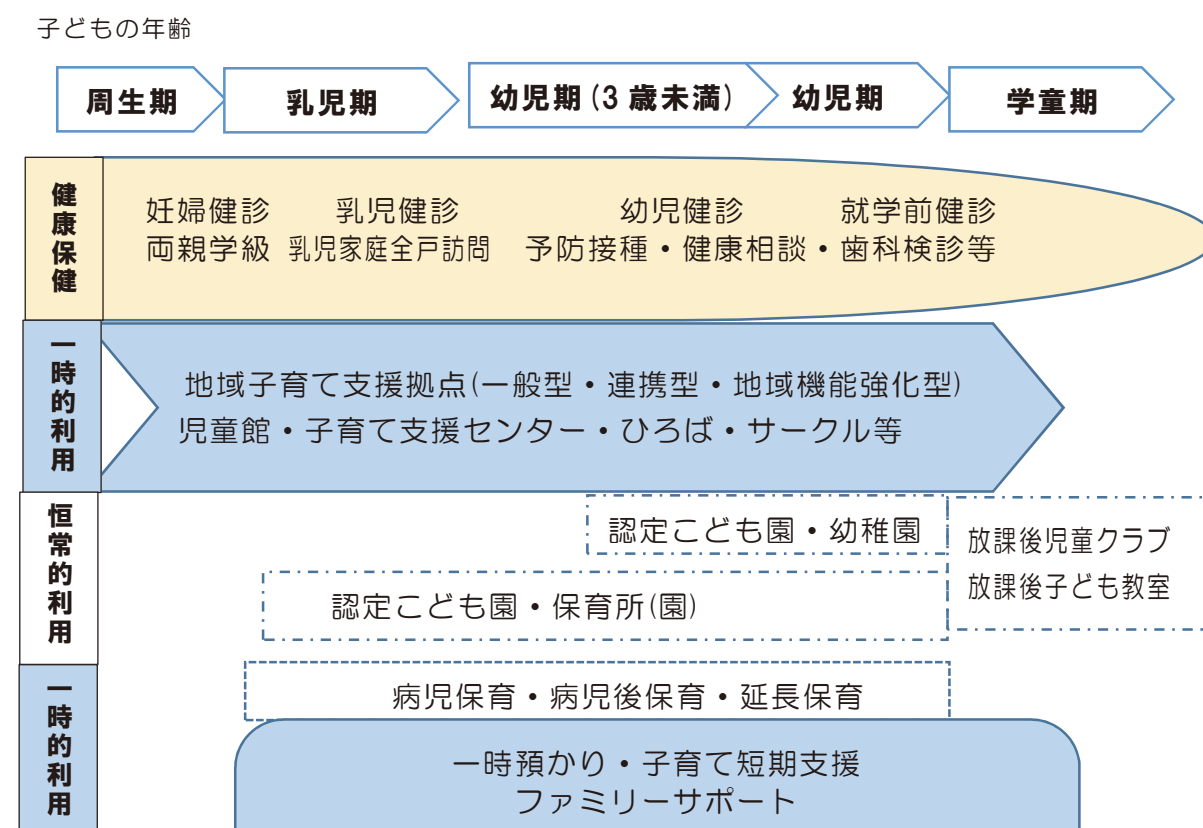
3. 地域連携

集まれ！人・モノ・情報

あなたが、見たい映画があったとしたら、どうしますか。その映画を上映している映画館を検索し、その上映日時を調べるでしょう。そして、自分の予定に合う時間に上映している映画館が見つかったら、そこまでの距離や交通機関を確認していくでしょう。今は、こうした情報の収集は、インターネットで比較的簡単に集めることができます。同様に、子育てサークルや保健所の健診などの情報も、携帯端末を使っても情報を集めることができ、若い人ほどそういう情報収集が上手です。しかし、そうした手段を持ちえない、あるいはうまく情報を集めることができない事情を抱えた親子もいます。そういう親子と出会った場合、あなたはどうしますか。やはり、支援する機関や場所などの地域の情報を整理しておくことが大切です。

それぞれの地域内で、提供しているサービスの多い少ないはあると思いますが、これらの提供されるサービスの内容と、その対象、主たる事業者の職種や人数などを一覧にしておくとい良いでしょう。

平成 27 年度 4 月から実施されている子ども・子育て支援新制度により、小学校入学前のすべての子どもを対象とする保育や子育て支援の場は広がっています。一覧にすると、次のようになります。



次に、健康保健関連であれば、健診の時期や場所、予防接種の摂取時期、両親向けの講習会や歯科検診の予定などを一覧にしておきます。保健所の窓口においてある月毎のイベントカレンダーをもらっておくのもよいでしょう。

例 <12月>

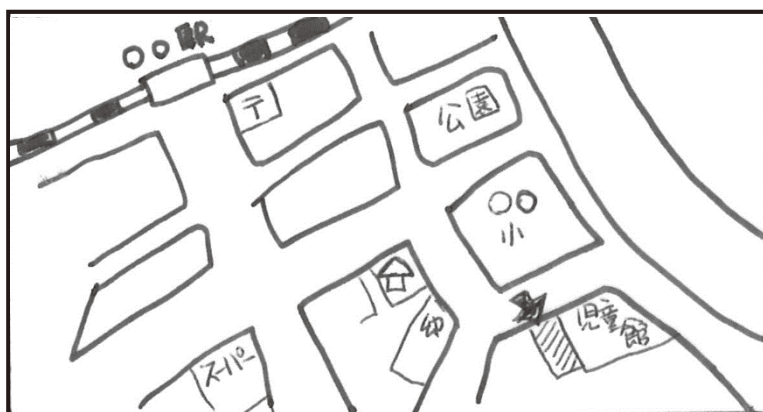
月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	4か月健診	18	パパママクラス	20
21	22 子育て相談	23	10か月健診	25	26	27
28	29	30	31			

休日時間
外診療は
〇〇病院

仕事復帰を考えている親や、就園前の子どもを持つ親のために、地域の認定こども園や保育所(園)、幼稚園の一覧も必要です。

区分	名称	所在地・連絡先	定員(1号認定, 2/3号認定)	内容(特徴)
認定こども園	A 園			
認定こども園	B 園			
保育所	C 園			
保育園	D 園			
公立幼稚園	E 園			
私立幼稚園	F 園			

近隣の児童館や子育て広場、子育てサークルの情報などは、マップ(地図)の上に標示しておくとうわかりやすいです。



このように、インターネットや諸資料からの情報を整理するという方法だけでなく、自らがそれぞれの情報の場に出向いて行って、その内実を「肌で知っておく」ということは大変重要です。単に「こういう場合に利用できるのは、〇〇という場所です」と伝えることと、「〇〇という場所には、△△という特徴があって、□□さんという人がいてね、・・・」と伝える方がより親しみやすく、利用者が「行ってみよう、相談してみよう」という気持ちにするために有効です。

3. 地域連携

地域の文化・人をつなごう

今皆さんが支援をしようとしているのは、どのような地域でしょうか。交通機関の便利な都市ですか？自然の豊かな田園地帯ですか？計画的に配置されたテナントの並ぶショッピングモールですか？昔ながらの市場ですか？地域の事情はさまざまですが、ないものねだりをするのではなく、そこにはきらりと光る宝物がきっとあるはずです。

【地域を知る】

まず、最初はこの地域を「知る」ことから始めましょう。時間が許せば、出来る範囲歩いてみて、地域を身体全体で感じてみましょう。身体で感じるとは、足を動かす、目をこらす、耳を傾ける、手を動かす、においを嗅ぐ、味わうという五感を通して感じ取りましょう。インターネットで検索するだけでは頭でっかちになりがちです。交通量の多い通り、ベビーカーを押していける場所、おむつ交換や授乳しやすい場所など、意外に情報が抜けてしまいます。

通りを歩いて、観察するポイントは、AIUEO(アイウエオ)の5要素です。

A(activity)：人や物の動き、流れ、経路、時間経過による(季節による)変化

I(interaction)：人同士やモノと人の相互作用、交流

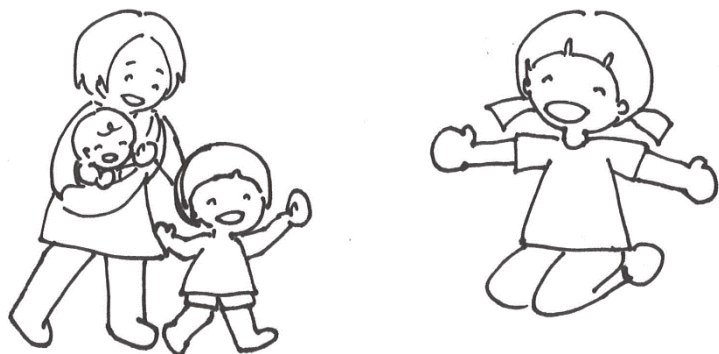
U(user)：その場所を利用している人のタイプ（性・年齢・グループ構成）

E(environment)：その場所の雰囲気、空間、設備、公共空間、私空間の境界

O(object)：観察エリアに存在するモノ。独特なモノ、または存在しないモノ。

こうして、得てきた情報を、「情報シート」に書き込み、仲間と共有しましょう。できれば、白地図の上に、集めてきた情報シートを置いて、全体を俯瞰してみましょう。同時に、年間のカレンダーに、その地域の行事やイベント情報を書き込んでみましょう。「ここはどうしているのか？」「誰が世話をしているのだろうか？」「どの部署に問い合わせたら良いのか？」など、次々に疑問が生じてきたらしめたものです。それを質問し答えてくれる人を探して話を聞くことで、さらに理解が深まります。

参考：寛裕介「ソーシャルデザイン実践ガイド」



【「地域」とつながる3つの形】

「場所」からのスタート

○近くに、子ども連れで行きやすい野山がある



「森のようちえん」のように戸外遊びの隠れ家づくり

○人が大勢あつまる商業施設ができた



企業のノウハウを生かして、親子連れがホッとできるスペースを

○開発された比較的年代の若い人たちが多い住宅地



若いお母さん同士をつなぐサークル活動と呼び水に

○統廃合で使われなくなった学校の校舎がある



市町村の空き家活用のアイデアを生かそう

「事例（人）」からのスタート

○双子の子どもがいる家族をサポートしたい



産科・小児科との連携の中で、多産だからこそケアを

○昔の遊びを教えてくれる名人がいる



地域の敬老会や利用者の祖父母世代にボランティアを依頼
町の子育て師範塾生で結成した
わらべ歌遊びグループ「どんぐり」
は、各地域の子育て支援ルームで
活躍中。



○子どもが病気の時に見てもらう人がいない



援助が必要な人と、援助できる人をつなぐしくみ

「接点」（行事・イベント）からのスタート

○年に1度の祭りがある



自治会や小・中学校の連絡協議会に入れてもらって企画に参加

○保育園の近くに、高齢者の施設がある



施設間での交流会は、互いの利用者が顔見知りになるチャンス

○利用する保護者同士仲が良く、元気で活動したい



利用者の特技を生かして、活躍の時間と場所の提供を

ほら、こうして考えていくと、「何もできない」ではなく、「あれもしてみたい」「この人とつながっていききたい」というアイデアが芽生えてきませんか？

3. 地域連携

学生ボランティアは大歓迎！！

子育て支援に、さまざまな世代が交流することは、とてもよいことです。市町村によっては、地域にある大学と協定を結んで、一緒に子育て支援の在り方を模索しているところもあります。

「大学が近くになくて」というところもあるかと思いますが、ルームのある場所に住んでいる家族があるということは、大学生もいらっしゃる可能性は高くなります。ぜひ、『学生ボランティアを募集しています』の声をHPにあげたり、募集案内を作ったりしてみましょう。最近の大学では、学生ボランティアセンターを設置しているところもありますので、そちらに問い合わせしてみるのもよいでしょう。

学生にボランティアに来てもらう時のポイントは、

その1：学生にボランティアとして、やってもらいたいことを明確に示す

その2：逆に、学生がどんなことをしたいのかをよく聞く。

その3：学生が親子に自然に関われるようにさりげなくつなぐ。

その4：子どもや親に対する言動は、支援者をモデルに真似させる。

その5：万一の事故に備えて、ボランティア保険に加入してもらう。

（大学のボランティアセンターで一括に加入している場合もあるので確認する）

ボランティア保険については、各市町村の社会福祉協議会が窓口です。



最初から堅苦しいと思われるかもしれませんが、最初にきちんとした枠組みを作っておくことが、無用な混乱を避けることにもなり、お互い気持ちよく過ごすことができますので、がんばってください。

学生さんとのふれあいは・・・

子どもたちにとって、若くて元気のあるお兄さん、お姉さんに一緒に遊んでもらうことは楽しいのは言うまでもありません。ボランティアをしようという学生は、基本的に子どもが大好きです。

そして、意外にも、学生さんの効果は、保護者にもあるのです。「支援される側」の立場だった保護者が、「教える立場」を味わえるからです。「子どもってこんな風にだくのよ」とむずがる赤ちゃんがお母さんに抱かれたとたんに、ピタッと泣き止み、「すごい、お母さんさすが」と学生に本気で言われることが、母親のセルフエスティームを高めます。

学生ボランティア自身にも、学生の持っている特技を生かして、ハンドベル演奏や人形劇などのイベントを企画して、実施してもらってもよいでしょう。学生にとっても、教育実習以外に、本音の反応が得られるチャンスです。また、直接親子に関わるだけでなく、支援ルームの環境である壁面装飾やおもちゃづくり、野外での活動時の安全点検や栽培活動、防災訓練など、活躍の場はいろいろあります。

そして、学生を通じて、その大学の先生方にも、ルームを紹介してもらいましょう。もしかしたら、そこからのつながりで、大学の先生による保護者向けの講座が開設できるかもしれません。

普段つきあっているスタッフのことばも良いですが、やはり理論をベースにした大学の先生のお話は、わかりやすく説得力があるものです。その道のプロの先生にきていただくことで、新しい視点で支援の在り方を見直すチャンスにもなります。兵庫県内の大学では、ひょうご地域子育て支援大学間連絡協議会を結成しているところもあります。そうした情報をうまく取り入れて、「支え合い、育ち合う」共通の目的で、近くにある大学と連携することをぜひ考えてみましょう。



3. 地域連携

小・中学生、高校生とのつながり

きょうだいたちをご招待

子育て支援の対象である家庭には、大きいお兄ちゃんやお姉ちゃんがいる場合があります。そういう家庭では、自分たちが学校に行って勉強している間に、何やらお母さんと弟や妹が楽しいところに行っているみたいと、興味津々です。土日や長期の休みには、お兄ちゃんお姉ちゃんを招待する日を設定してもよいかもしれません。大喜びでやってくるでしょう。

そこで、スタッフもきょうだいたちと仲良くなって、学校の情報も教えてもらおうと良いですね。今どきの小学校の授業内容や、行事・地域の広場開放の情報を得ることができます。ご招待日は、1日にすると小学生のパワーに圧倒される親子もいるかもしれません。日にちや時間を分散するとか、親子が静かにホッとできる場所を確保しておくなどの配慮が必要です。



1 日赤ちゃん先生

地域によっては、保健課が窓口になって小学校と連携し、「赤ちゃんを連れて学校に行こう」などの企画をされているところもあります。弟や妹のいない一人っ子も多いので、赤ちゃんに触れ合える体験は、小学生にとって大変貴重です。「こんなに真っ赤な顔して泣くんだね」「すごい、よく手足を動かしてる」「目、見えてるのかな、ぼくの顔見て笑ったよ」など、感動を持って赤ちゃんとの触れ合いから学びます。反対に、保護者にとっても、我が子の将来像を思い描く上で、「小学生ってこんなにしっかりしているんだ」「あんなお姉ちゃんに育ってほしい」などと、育児の見通しを具体的に持つことができます。



トライやる・ウィークを活用しよう

兵庫県では、公立中学 2 年生が 1 週間地域のいろいろな事業所や店舗などに出かけていき、多様な就業体験や社会体験を積み重ねる体験学習が導入されています。生徒たちが、地域に学び、共に生きる心や感謝の気持ちを高めるなどの「生きる力」を育成することが目的ですから、支援ルームもその体験の場の一つとしての機能を十分兼ね備えている場です。年度当初に地域の中学校とも連絡を取り合い、中学生が小さい子どもを持つ家族と触れ合うチャンスを作ってあげましょう。

また、中学校の技術・家庭科教育の中の家庭分野で「家族・家庭と子どもの成長」という内容があり、近隣の保育所や幼稚園との交流、遊び道具の制作を行うなどの活動を取り入れている中学校もあります。こうした現状を把握した上で、その地域で取り組みやすい活動から始めてみるとよいでしょう。



トレーナーのリサイクルで
「すごろく」



かわいい
「おさかなつり！」



カスタネット付き
「もぐらたたき」

高校生は、次世代のパパ・ママ候補

高等学校でも、中学校の学習の延長として、「子どもの発達と保育」という科目があり、平成 22 年度に、県教育委員会が作成した『ひょうご親学習プログラム』を有効に活用し、保健体育や道徳教育とも絡ませ、地域の子育て支援施設との交流を始めています。ある子育て支援施設では、年間通じて、月 1 回親子と高校生が触れ合う時間を設け、1 か月ごとの赤ちゃんの成長を観察できるようにするという取り組みをされているところもありました。1 か月に 1 回と言っても、0 歳児の成長は目まぐるしく、首が座った、寝返りした、ハイハイからつかまり立ちと、生後 3 か月から 1 歳位までの子どもの成長を目の当たりにして、子どもへの認識を変化させた高校生も多く、子どもへの抵抗感が減ったと言う話も聞きました。

このような活動のベースは、カナダでの子育て支援の取り組みがあるようです。参考文献にはあげていますが、海外においても学生時代に小さな子どもと関わる取り組みが積極的に行われていることがわかります。子育てを通して、地域の世代間交流が広がることはとても意義深いものであるといえるでしょう。



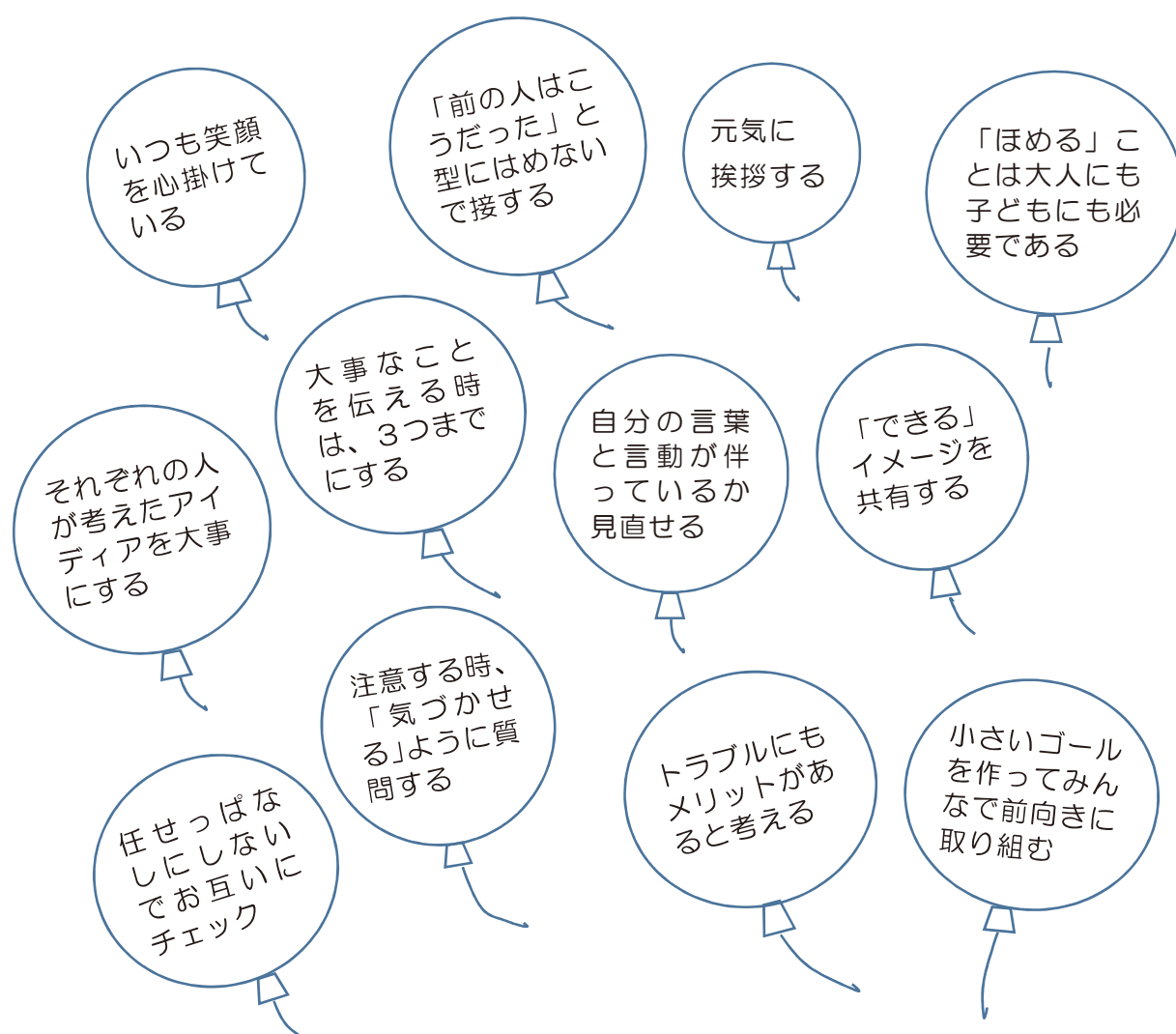
4. スタッフの協働・振り返り

スタッフのチームワークはルームの要

子育て支援の場では、親と子ども、親同士の関係づくりはもちろん、スタッフ同士の関係づくりも大切です。スタッフ同士が口もきかない、アドバイスがてんでバラバラという雰囲気の子育て支援の場では、安心して親子が過ごせるはずがありません。たった一人の立派な支援者がいても、そこが居心地のよい場所とは限りません。スタッフ同士、いろいろな経験の差、年齢の差はあっても、お互いの良さを認め合って、リラックスし、自分の持っている力が発揮できつつも、うまく調和するような雰囲気や仕組みの工夫が大切です。

バイオリンやタンバリン、すす、カスタネットそれぞれの楽器の良さを活かしつつ、その支援の場所ならではの素敵な合奏ができると良いですね。

スタッフ同士が育ち合うための 12 個の風船があります。あなたが心掛けている風船に色を塗りましょう。いくつの風船に色が塗れるでしょうか。





それぞれのスタッフの持ち味をうまく活かすには、チームをまとめるリーダーが重要です。

リーダーの役割を担うベテランのスタッフは、温かい雰囲気づくりをこころがけ、経験の浅いスタッフが相談しやすい雰囲気を作ることが大切です。何でも自分でやらないと気が済まないという人は向きません。



スタッフ全員で情報を共有化します。

曜日や時間によって、スタッフが交代するところもあるでしょう。それぞれのスタッフがさりげなく引き出した親子の情報は、自分だけのものにしないで、互いに声をかけあって、「最新情報」を共有化するようにしましょう。スタッフで集まる日や時間を設定しておいたり、共有データシートを作って、お互いに読み合うような工夫が必要かもしれません。



失敗は、学びの絶好の機会です。「トラブルチャンス」ととらえましょう。

子どもは、けんかを経験することで、けんかにならないようにしていく方法を考えるようになります。大人も同じです。子どもの命にかかわるような危険は絶対に避けねばなりませんが、大きな不利益が生じないような場の失敗や、互いにフォローの出来るような失敗は「トラブルチャンス」ととらえましょう。

「しまった」と思うことは、「なぜ失敗したか」「繰り返さないためにどうすればよいか」を考えましょう。当然、利用者からの苦言もきちんと受け止め、対応策をスタッフ全員で講じるような体制が必要です。



日々の活動を振り返る時間を設けましょう。

日々の活動に追われるだけでは、現状維持も難しくなるものです。魅力的な活動や居心地のよい居場所づくりのためには、絶えず改善策を模索する姿勢が不可欠です。現状の課題や、次の活動の目標など、スタッフ全員で出し合い、話し合ってみましょう。



4. スタッフの協働・振り返り

関係調整のテクニック

子育て支援の場は、規模に関わらず地域ネットワークの中心で、コミュニティです。子どもの発達、保護者の成長という個人の発達だけでなく、そのコミュニティ全体の Well-Being を促進するための介入の方略とサービスも兼ね備えた総合的に援助する仕組みです。

コミュニティには、色んな考えの人がいます。どこか違うと思っても、多少のことには目をつぶって、とりあえずやってみましょう。

ここでは、次の3つの項目の5つの質問に答え、次頁の三角形を描いてみましょう。あなたの属している子育て支援の場を思い出して、できている項目に、チェックしてみましょう。そして、チェックの数を数えて、□の中に書き込みましょう。

(1) 支援の場の体制

- ☐ 適切な人数の支援者がおり、引き継ぎがされている
- ☐ 支援者が個人で抱え込まないですむ体制がある
- ☐ 専門性を高める研修の機会がある
- ☐ 情報の管理が適切に行われている
- ☐ 支援者自身の生活向上への配慮がある

□ 個

(2) 職員間の連携

- ☐ 全体的な話し合いの場を共有できる
- ☐ 子どもの個別性への共通理解がされている
- ☐ 機関内の支援目標が明確で、共有化できている
- ☐ 支援者への専門性の向上への協力がされている
- ☐ 内部の役割分担が明確にされている

□ 個

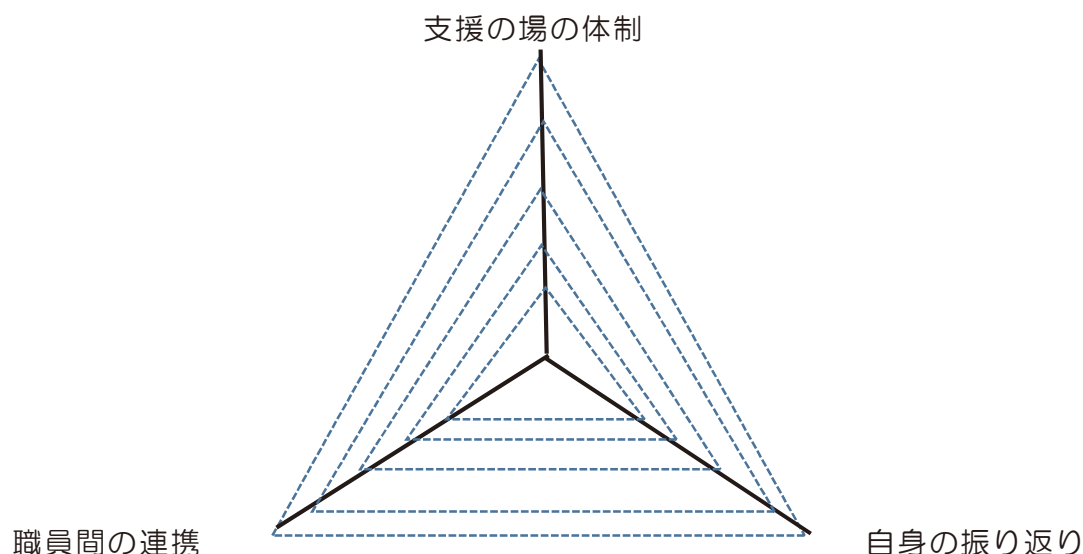
(3) 自身の振り返り

- ☐ 自己の専門性の向上に努めている
- ☐ 子どもへの支援を理解している
- ☐ 保護者への支援を理解している
- ☐ 安全への配慮ができている
- ☐ 社会資源の活用の仕方を理解している

□ 個

※「子育て環境と子育て支援」安梅勅江著『保育の質チェックリスト』を改変

では、次に三角形のそれぞれの項目の数に印を入れてみましょう。
どんな三角形ができましたか？



このようなチェックリストは、なんのために必要だと思いますか。また十分でない部分に気づくこと、意識を持つことから、取り組みはスタートします。三角形が小さいからだめと言うことではありません。ここから、手始めに何をしたいこうと考えるための窓口としてとらえて頂きたいのです。

これからは、「子育て支援の質」の向上が求められる時代です。今おかれている現状をしっかりと把握したうえで、次のステージへ仲間と一緒にステップアップする手立てを考えていきましょう。三角形全体を1段階ずつ大きくしていくのか、右の角から取り組んでいくのか、それはみんなで話し合って改善策を、作戦を練ってみてください。

評価はよりよい子育て支援の専門性の向上への第一歩です。そして、支援者のプロである限り、項目の1つ1つの意味を問い直し、技術に磨きをかけて、発展させていく必要があります。

また、このチェックリストは、あくまでも基本的な形でしかありません。それぞれの施設で、「うちは、四角形にしよう」「うちは、スターを目指し、五角形にしよう」とバージョンアップや項目数を増やしていただけることを願っています。



4. スタッフの協働・振り返り

親とスタッフが共有できる記録

どんな記録を残していますか？

あなたの支援ルームにある記録はどのようなものがあるでしょう。利用者票・事故等発生記録簿・行事記録・支援ルーム日誌・支援ルームだより・月(イベント)のお知らせ・備品管理簿及びボランティア登録票・育児相談記録簿・子育て支援センター記録簿類等……。それぞれの支援事業によって、他にも必要とされる記録はいろいろあるかもしれません。

大別すると、開室日の全体像がわかる日誌タイプと、個人の利用者の記録の2つと、運営上の管理簿のような記録になるでしょう。

支援者として書く記録の代表的なものは、日誌と利用者の記録でしょう。これらは、支援ルームで決められた様式がある場合と、スタッフが個人で備忘録のように記録している場合があります。日誌の例は、下図のような形ですが、内容は必要に応じて時間枠を設けたり、イベントの部分だけを別の記録にまとめたりすることができます。

日 誌				
第 回	年 月 日 () 曜日	天候	記録者	
時間	時 ~ 時			
参加者			ボランティア	
	大人()人子ども()人合計()人		合計()人	
内容 (イベント等)				
特記事項				
連絡事項			()から	()さんへ ○見ました

スタッフが日替わりの場合、引き継ぎたいことを書いて、確認するようにしておくと、洩れる心配がありません。

相談記録表の例です。

相談記録		年 月 日 ()	
相談者		男・女	歳
(子ども)		男・女	歳 か月
相談にいた る経緯			
相談内容	(相談時の様子) 親、子どもの観察 (相談申込み理由) (話の経過)		
対応・アド バイス	(判断) (助言や情報の提供) (申し送り事項)		
備考			

相談者 _____

- ・記入上の注意は、事実を簡潔にまとめる必要がありますが、具体的客観的な記述を心掛けましょう。相談員の判断と対応・助言内容も区別しておきましょう。

記録の管理に注意

利用者やボランティア等の個人にかかわる情報は登録する際に聴取することが多いでしょう。その際、それらは利用してもらうにあたって必要であること、外部に洩れることはない旨を伝え、承諾を得た上で個人情報聴取します。地域子育て支援拠点事業における実施要項の中に、以下のように守秘義務が規定されています。

事業に従事するもの(学生等ボランティアを含む)は、子育て親子への対応に十分配慮するとともに、その業務を行うに当たって知り得た個人情報について、業務遂行以外に用いてはならない。

スタッフになら話せると言う利用者の話の内容を安易に他の利用者に伝え、それを利用者本人が知った場合、以後安心して話せなくなるかもしれません。地域の人々が出会い、つながる場所だからこそ、安易に個人情報が広がらないという安心感を提供することが求められています。スタッフ間で、個人情報の取り扱いについては、確認し、共通理解しておくことが大切です。また、これらの書類は、関係者以外の目にふれない鍵のかかる場所に保管しましょう。

支援者の記録（子どもの遊びの観察から）

子どもたちがルームで見せるさまざまな表情や遊びを、写真とともに記録にしているところもあります。エピソード記録とか、ポートフォリオのようなものです。子どもの遊びを見ていると、「おもしろいなあ」とか「こんなことができるんだ」などびっくりするようなことがあります。そうした場面を簡単に書きとめておくことは、後で振り返る時にも有効です。このように、記録を綴っていくことで、子どもの成長がよく見えるようになりますし、次にどのような玩具をどういう場所に置くのが良いのかなど、支援ルームの環境を考える上でも、役に立ちます。

また、こうした記録は、ぜひ保護者とも共有したいものです。ただし、一人の子どものことばかり書いて、記録の量が極端に違うというのは困りますが、一人ひとりの子どものファイルを作って綴っていくと、「成長の記録」になりますね。

親と共有できる記録とは

スタッフやボランティアが書いた記録だけでなく、可愛いメモ用紙を用意しておいて、保護者も子どもの様子を見ていて書きたくなったら、ちょこちょこメッセージを書いて、同じようにファイルに入れていくのもよいです。子どもの描いた絵や作った折り紙作品なども挟めるように、クリアポケットが 20 位あるファイルだと、入れやすいと思います。

そして、子育て支援ルームから就園する時には、ファイルを保護者にプレゼントします。きっと、ご家庭で何回も読み直すことのできる良い「思い出ファイル」となり、子どもさんが大きくなった時には自分で読むこともできるかもしれません。これは、子どもの記録の例です。実際は A4 用紙 1 枚(横向き)に書きます。

9月11日(金) 天気	タイトル「げんき・ストーリー」	ひょうご げんき くん	1歳3か月	記録：兵庫
-エピソード-				
-振り返り-				

第3章

子どもをめぐる共生社会へー



1. 多世代交流の場として
 - (1) 高齢者の思い
 - (2) 世代による親子への眼差し
2. 社会全体で子育てを

1. 多世代交流の場として

子育て支援ルームは、地域に根差しているものですが、その地域こそ大きな意味があります。それは、従来わが国がそうであったように、子どもの成長を地域で見守るという「地域コミュニティ」の再生にもなることだからです。今の時代は、地域のきずなが次第に弱くなり、個々人が全く知らない状況に追い込まれています。子育て世代は多忙で、なかなか子どもをめぐってのかかわりを他の人々と分かちあうことが難しくなっています。しかし、子育て支援ルームという場所に親子で参加できることで、そこに多世代の方々が集まることができます。特に、昼間地域にいる高齢者の方々が子育て支援ルームに来て、子どもたちの遊びを見ることで、やさしい気持ちを持てたり、自分も何か関わられることを探したりするなど、生き生きしていきます。

幼子は素晴らしい力を持っており、生命力は周囲に伝播していき、知らず知らずの間にしあわせな気持ちになり、力を得ることができます。きっと以前は地域に住むことでそのような力を子どもたちからもらっていたのでしょう。このような意識を持ちながら、支援ルームを閉じることなく、無理せず開いていくことを心がけていきたいものです。

(1) 高齢者の思い

高齢者は、どのように子育て支援について考えているのでしょうか。兵庫県でアンケート調査とインタビューをしたところ、「子育て支援をしたいと思っているが、なかなかきっかけがない」と思っている高齢者が多くいらっしゃることがわかりました。それも、「自分から参加するというより、声をかけてもらったり、何かを実際にしてほしいと具体的に依頼されたりした方がやりやすい」ということでした(表1 参照)。

表1 子育て支援に参加できない理由

理由(複数回答可)	回答数(件)	回答割合(%)
参加する時間がない	322	25.9
アクシデントがおこると面倒	288	23.2
きっかけがない	465	37.5
親がすること	155	12.5
情報がない	111	8.9
関わりが苦手	72	5.8
世話の経験がない	56	4.5
その他	140	11.3
無回答	65	5.2
合計	1674	135.0

参考としてお孫さんへのかかわり方について、「外食をした際の支払いをする」や「一緒に買い物に出た際の支払いをする」というものが多くみられました。（図1参照）さらに、子どもの子育て世代とうまくやっていくためにはどうしているのか自由記述で求めたところ、「子育てについて、口を出さない」「いつでも手伝う準備はあるが、言われるまで黙っている」という意見が多く、出来るだけ余計なことは言わないように気をつけている、といった子育て世代に対する気遣いが読み取れました。特に、自分の子どもに対して遠慮が先に立つ高齢者がおられることがわかりました。

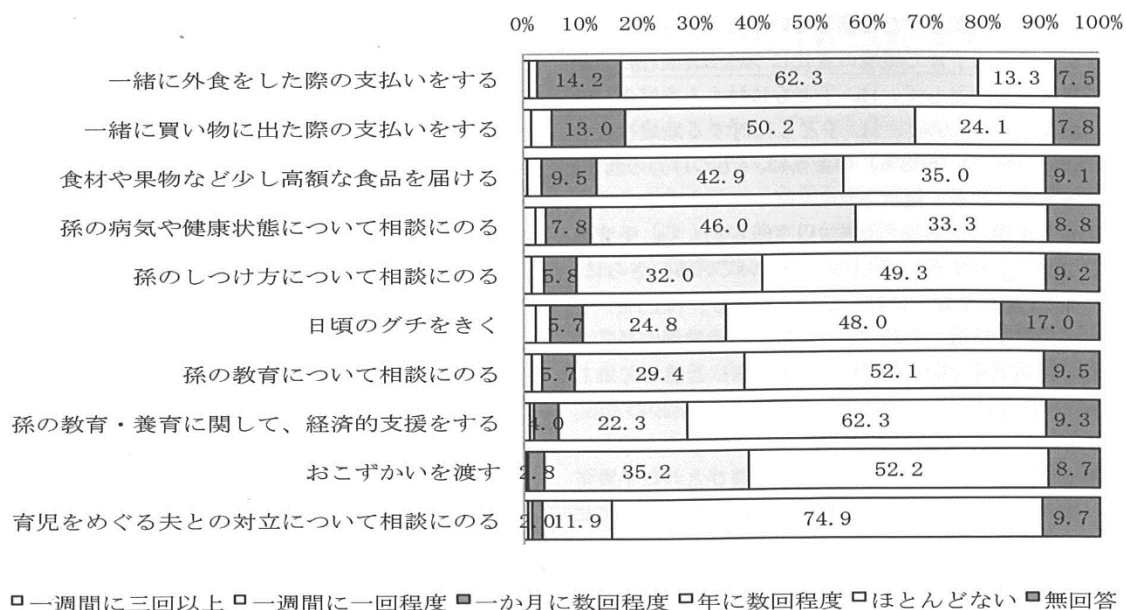


図1 子育て中の親世代（親族）への関わり方とその頻度

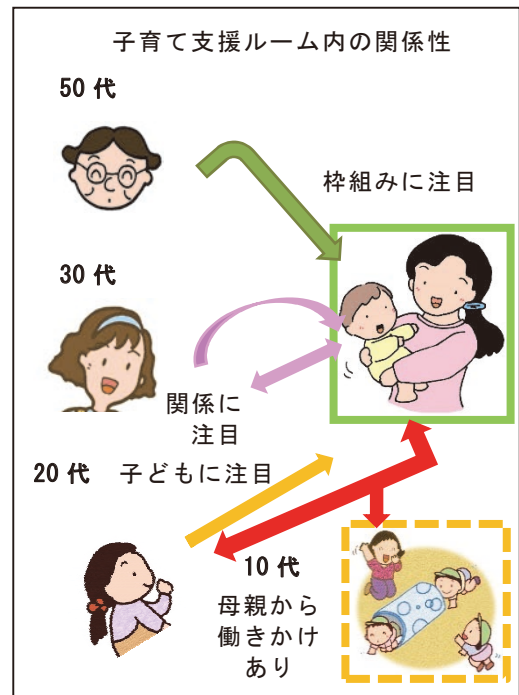
そこで、血縁関係よりも地縁による子育て支援を提案したいと思います。地域での顔見知りはその子どもの成長にとってもきっと大きな役割を果たすでしょうし、高齢者にとっても元気の源にもなることでしょう。そこでのつなぎ役としてのキーパーソンになる役割も子育て支援ルームに必要と考えていきたいものです。

（2）世代による親子への眼差し

ここでは、18歳～50歳代以上の各世代から見た親子への眼差しの相違について、女性にインタビューした結果から述べましょう。

同じ支援ルームにいる親子について、学生である18～20歳代は、これから子育てをする年代です。この世代は、子どもと一緒に遊ぶことが楽しく、親子に対しても親子というよりも、自分と子どもとの関わりを中心に捉えています。また、保護者に言葉をかけやすく、受けとめる方も感心していることがわかりました。30～40歳代になると、親子一緒に見る視点になり、その関わりについて高い関心を示し、親が子どもにどのように働きかけているのか、という点を中心にしています。さらに、50歳代以上になると、親子のあり方として見るようになり、自分の子育て経験を含めて「子育て」のあるべき姿として見る傾向があります。

このように、子育て支援ルームという同じ場所で同じ親子を見ていても、向けられる眼差しは、年代による相違が見られる傾向がありました。これは、子育てというものが、誰にとっても身近なものであること、そして、近い将来経験するであろう世代、今まさに子育て真っ最中、そして、子育ての経験済みという子育てがもつ当事者性が大きく作用していると言えます。この結果は女性に限るものですが、男性の親子への眼差しとは大きく異なることが予想されます。したがって、男女の相違は考慮すべきことですが、少なくとも眼差しが世代によって異なるという実態があることを鑑み、多世代交流を考えていかななくてはならないと思われます。



2. 社会全体で子育てを

最近では、子育て支援ルームにいかにしてパパを取り込むか、ということが話題としてあげられます。それは、パパの参加が、ファミリーサポートに直結するからです。父親の育児参加は、子どもを両親で育てるという本来あるべき姿に近づけることであり、母親の育児負担を軽減するものです。育児を母親任せにしないで、双方ともに支え合い、協力し合うことで、「まあよく子育て」する円満な子育てにつながっていくのでしょう。そして、そのような子育て世代を中心に、各世代が地域ぐるみでかかわっていくコミュニティこそ、社会で子育てする共生社会につながっていくのだと言えます。

地域社会で子育て支援といっても、難しく考えることはありません。例えば、ご近所の顔見知りの場合は、そこに幼いお子さんがいたら、いつもの「こんにちは」だけではなく積極的に声をかけてみましょう。その子どもに語りかけるように挨拶したり、「元気で遊んでいるね」「お母さんといっしょでうれしいね」と言ったりというように、見えている事柄をそのまま言葉で言って語りかけるといいでしょう。何か言わなくては、というのではなく目の前に見えていることをそのまま言葉にすればいいのです。

そのような大人同士の言葉でのやりとりが、そこにいる子どもにとっても雰囲気として醸し出されます。やさしい空気が流れます。そして、そのような親子に対する温かいまなざしが保護者にとっては、子育て応援として感じられるのです。

子どもをめぐって社会全体で楽しく子育ての喜びを分かち合うこと、これこそがこれからの方向性であり、また、この理念を持って現実化していくことが子育て支援のあるべき姿であると確信しています。子育て支援員としても少しでもお役に立てたら、と日頃の研鑽を深めたいものです。

お わ り に

平成 27 年 4 月より厚生労働省は、子育て支援研修事業実施要項を定め、各市町村区での対象者への研修実施を進めるよう通知を出しました。これを受けて、今から支援員としてのお仕事を始めようとする方は、その研修を受けることになります。そこでは、もう少し「子育て支援員とは何か」という基礎的・概論的な部分から学ぶことになるでしょう。

このマニュアルは、それよりも今現在地域の親子やご家庭に対して、何らかの子育て支援を行っていらっしゃる方を念頭において作成しました。より現場に即した実践的な内容になっていると思います。だからといって、経験値からランダムに内容を選定したのではありません。兵庫教育大学院では、いち早く平成 25 年度より子育て支援コーディネーター養成に取り組んでまいりました。その中で 0 歳から就学までをトータルに見据えた乳幼児教育、乳幼児を持つ親や家族、取り巻く地域が 1 つになってより良い子育て環境を構築するための研究を進め、その中で、子育て支援コーディネーター養成のプログラムを開発しました。このマニュアルは、その基本的な部分をベースにして、より現場の支援員がすぐ明日からやってみようと思って下さるように、同じ子育て支援ルームの担当者として「こんなのがあったら良いな」をまとめました。まだまだ内容的には十分なものであるとは言えないと思います。このマニュアルを手にとって下さった皆様からのご意見・ご要望を聞かせていただけることを楽しみにしています。

なお、もう一歩進めて「子育て支援コーディネーター」を目指そうという方は、ぜひ大学院の門をたたいてください。子どもとともにある今の生活にまなざしを向け、互いに手を取り合い、希望ある未来を切り開きましょう。

参考までに、当大学で開講している授業科目をお示しします。この授業科目から所定の単位を取得した方に、「子育て支援コーディネーター」（兵庫教育大学）の認定証が授与されます。



地域子育て特別研究	幼年期の子育て支援演習
幼年期のカリキュラム論と保育・教育方法	幼年期の教育支援と職能開発
乳幼児の発達と心理	子育て相談支援論
幼年期の心理学方法論（量的研究法）	幼年期の心理学方法論（質的研究）
幼児の生活と健康	幼児の生活論演習
幼児の生活と表現	子育て支援内容開発論

引用・参考文献・資料

第1章

- ◇ 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会・日本子ども家庭総合研究所編(2014) 日本子ども資料年鑑 KTC 中央法規
- ◇ 内閣府(2004)平成 16 年度少子化社会
http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2004/pdf_h/pdf/g0hyohsi.pdf

第2章 みんなで子育て

- ◇ 高取しづか+JAM ネットワーク(2007)『イラスト版気持ちの伝え方』合同出版
- ◇ ニフティ株式会社 動物エゴグラム www.nifty.co.jp/csr/edu/eg/
- ◇ 子育て支援者コンピテンシー研究会(2006)『育つ・つながる子育て支援』チャイルド本社
- ◇ 阿部利彦(2006)『発達障がいを持つ子の「いいところ」応援計画』ぶどう社
- ◇ 高山恵子監修(2007)『育てにくい子に悩む保護者サポートブック』学研
- ◇ 堀公俊/加留部貴行(2013)『教育研修ファシリテーター』日本経済新聞出版社
- ◇ 大豆生田啓友・太田光洋・森上史朗編(2008)『よくわかる子育て支援・家族援助論』ミネルヴァ書房
- ◇ 渡辺顕一郎/橋本真紀(2015)『地域子育て支援拠点ガイドラインの手引』中央法規
- ◇ 寛裕介(2013)『ソーシャルデザイン実践ガイド』英治出版
- ◇ ひょうご地域子育て支援大学間連絡協議会(2013・2014) 子育て支援コーディネータースキルアップ講座テキスト
- ◇ 假屋崎省吾・横山洋子(2012)『ユーキャンの先輩保育者の教科書』自由国民社
- ◇ 安梅勅江(2004)『子育て環境と子育て支援』勁草書房
- ◇ 子育て支援プロジェクト研究会編(2013)『子育て支援の理論と実践』ミネルヴァ書房
- ◇ 家庭的保育研究会『家庭的保育の基本と実践 家庭的保育基礎研修テキスト』福村出版
- ◇ 田中哲郎(2011)『保育園における事故防止と安全管理』日本小児医事出版社

第3章 子どもをめぐる地域の再生

- ◇ 名須川知子・上月素子・井上千晶・番匠明美・濱田格子・新道由記子(2015) 世代間の交流としての子育て支援に関する研究 兵庫教育大学研究紀要第 47 巻
- ◇ 名須川知子・高畑芳美・磯野久美子(2015)
Practice on intergenerational exchange programs through children
67th OMEP World Assembly and Conference

<執筆者一覧>

名須川知子 兵庫教育大学 副理事・教授
(就学前教育カリキュラム研究開発室 室長)
高畑 芳美 兵庫教育大学 特命助教
(就学前教育カリキュラム研究開発室 室員)
磯野久美子 兵庫教育大学 特命助教
(就学前教育カリキュラム研究開発室 室員)

<監修>

伊藤 篤 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 教授

子育て家庭に寄り添う支援者マニュアル

このマニュアルは、平成 27 年度県の少子化対策事業として、実施する「地域の子育て力アップ事業」研修会のテキストとして、兵庫教育大学の就学前教育カリキュラム研究開発室が委託を受けて作成しました。

平成 28 年 1 月 発行